

生活科学論		担当教員	ふじ 藤	わら 原	まさ 正	とし 敏
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択			
講義	2 単位	1 年次前期	必修			

[1] 授業のねらい

情報通信技術（IT）の進展により、情報が時間、空間を超えて、瞬時に伝わる社会が実現した。そのため、私たちの生活においても、働き方、学び方、ショッピングの仕方、医療の仕組み、行政の機能などが変わりつつある。一方、格差社会、少子高齢化社会の到来、地縁血縁などのコミュニティの崩壊が進んでいると言われている。私たちの生活をITの活用により、安心安全で、活力ある社会にしていかなければならない。本科目では、情報を科学的に捉えて、ITの利便性と欠点に理解を深めて、私たちの日常生活のあり方、社会との関わり方、情報システムのあり方について考察する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 生活科学論について
- 第 2 回 高度情報化社会における生活科学
- 第 3 回 日常生活と情報の関わり- 1 情報の収集・整理
- 第 4 回 日常生活と情報の関わり- 2 情報の加工・表現・発信・交換
- 第 5 回 日常生活と情報の関わり- 3 衣食住における情報の役割
- 第 6 回 日常生活と情報の関わり- 4 生活環境と情報
- 第 7 回 日常生活と情報の関わり- 5 デザインと情報
- 第 8 回 中間まとめ
- 第 9 回 人間と情報通信技術の情報処理のちがひ
- 第 10 回 情報伝達の多様化と生活の変化
- 第 11 回 情報社会の進展と日常生活
- 第 12 回 情報社会のもたらす影響と課題
- 第 13 回 情報社会における個人の役割と責任
- 第 14 回 情報社会の進展と光と影
- 第 15 回 総まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施する。
小テスト 60%（2 回）と演習課題 40%（4 回を予定）、講義ノートで総合評価をする。

[4] 教 材

藤原正敏他『ネットワーク社会における情報の活用と技術』三訂版（実教出版）
藤原正敏他『ネットワーク社会における情報の活用と技術』三訂版 学習ノート（実教出版）

[5] 参考図書

Web教材、配布プリント

衣生活論		担当教員	まえ だ ひろ こ 前 田 博 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

現代の衣服は機能性、ファッション性等、さまざまな要素を必要としている。それらは、技術の進歩、トレンド性を歴史的背景として保持して進化してきた。

私たちが「衣」をまとうことの意を歴史、素材、色彩により考察し、これからの衣生活について考える力を身につける。

また、ファッションビジネス検定対策も平行して行う。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 オリエンテーション 衣服と社会のかかわり
- 第 2 回 衣服の歴史(1)
- 第 3 回 衣服の歴史(2)
- 第 4 回 衣服の歴史(3)
- 第 5 回 衣服の歴史(4)
- 第 6 回 衣服の歴史(5)
- 第 7 回 衣服の素材(1)
- 第 8 回 衣服の素材(2)
- 第 9 回 衣服の素材(3)
- 第 10 回 衣服の素材(4)
- 第 11 回 衣服の色彩(1)
- 第 12 回 衣服の色彩(2)
- 第 13 回 流行予測、プレゼンテーション(1)
- 第 14 回 流行予測、プレゼンテーション(2)
- 第 15 回 まとめ・これからの衣生活

[3] 評価の方法

レポートと試験期間中の試験とで評価する。

試験 60%、レポート 40%の割合で評価する。

欠席、遅刻、早退については減点する。

[4] 教 材

深井晃子著『世界服飾史』(美術出版社 1998)

『ファッションビジネス〔I〕ファッションビジネス能力検定試験 3 級準拠』

((財)日本ファッション教育振興協会)

[5] 参考図書

京都服飾文化研究財団編『モードのジャポニスム』

住生活論		担当教員	うちやまひでき 内山秀樹
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	1年次前期	選択

[1] 授業のねらい

住まいは、人間にとって最も基本的な生活空間であり、一生のうち最も多くの時間をここで過ごしている。住まいの良し悪しは、心身の健康はもとより、子供の成長発達や家族生活の安定、高齢者の自立など、安心・安全な生活に大きく影響する。

この講義で学習目標は以下の通りである。

- ①「眠る」、「食べる」、「着る」、「入浴・排泄」などの生活行為そのものを科学的に理解する。
- ②上記の生活行為を豊かにするために求められるすまいのあり方について理解する。

なお、この授業はすまいのプランニングやインテリア関連分野を目指す方にとっては導入部の基本的なものであるため、必修の授業である。

[2] 授業の計画

- 第 1回 授業ガイダンス：住生活論とは？
- 第 2回 人と生活(レポート1：わが家の間取りとわが家のライフスタイル)
- 第 3回 眠りの空間(1) 眠りの生理と快適な眠りの環境
- 第 4回 " (2) 就寝様式の変遷とその空間計画
- 第 5回 食事の空間(1) 食事様式と食事環境の変遷
- 第 6回 " (2) 食事空間、調理空間の計画
- 第 7回 着る 快適な着衣環境と衣服の収納計画(レポート2)
- 第 8回 水回り空間(1) 入浴排泄の様式の変遷
- 第 9回 " (2) 入浴排泄空間の計画
- 第10回 つきあい空間(1) つきあい空間の歴史
- 第11回 " (2) つきあい空間の計画
- 第12回 子育てと住まい(1) 子どもの発達とすまい
- 第13回 " (2) 子ども部屋の計画(レポート3)
- 第14回 お年寄りが暮らしやすい住まい
- 第15回 講義のまとめ：人と環境にやさしいすまい手になろう

[3] 評価の方法

レポートと試験期間中の試験とで評価する。

試験 60%、レポート 30%、ふりかえりシート(受講姿勢)10%のウェイトで評価。

欠席、遅刻、早退及び授業の妨げになる行為(私語、携帯電話など)は減点する。

[4] 教 材

林 知子他『住まい方から住空間をデザインする』(彰国社 2000)

[5] 参考図書

後藤 久監修『住居学入門』(実教出版社 1999)、住田昌二編『現代の住まい 基礎住居学』(光生館 1986)、岸本幸臣『図説テキスト 住居学』(彰国社 1997)、小澤紀美子編『豊かな住生活を考える－住居学』(彰国社 2002)

[6] その他

私語が目立つ場合は座席指定とする。机上には授業に関係ないかばん等を置くことを禁ずる。

人間関係論		担当教員	しみず 清水	さとし 聡
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択	
講義	2 単位	1 年次後期	選択	

[1] 授業のねらい

複数の人間が近くに存在する、あるいは一緒に活動している社会的場面において、人間がどのように考え、行動するののかについて学ぶ。授業では、社会的場面における個人の心理的過程、対人行動、集団と個人の関係、人間関係の形成などに関する代表的なトピックスを取り上げて概説する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 集団と個人 1
- 第 2 回 集団と個人 2
- 第 3 回 集団と個人 3
- 第 4 回 態度と態度変容
- 第 5 回 社会的影響
- 第 6 回 リーダーとリーダーシップ 1
- 第 7 回 リーダーとリーダーシップ 2
- 第 8 回 社会的認知 1
- 第 9 回 社会的認知 2
- 第 10 回 自己 1
- 第 11 回 自己 2
- 第 12 回 魅力と対人関係 1
- 第 13 回 魅力と対人関係 2
- 第 14 回 援助と攻撃 1
- 第 15 回 援助と攻撃 2

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施せず、レポート及び小テストにより評価する。

レポート 30 点、講義中程に課す。内容は講義中に指示する。

小テスト 70 点、毎回の講義の冒頭に行く。各 5 点ずつ。(第 1 回目は実施しない)

[4] 教 材

テキストは使用しない。適宜プリントを配布する。

[5] 参考図書

講義中に指示する。

生活環境論		担当教員	にし ばた とし ひで 西 畑 敏 秀
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次後期	必修

[1] 授業のねらい

基礎的なデザインの世界の知識や見識を深め、よりデザインという職業への理解を高める。様々な分野で活躍するプロの現場での仕事ぶりや、それぞれのこだわり信念について学ぶことで、デザインと社会との関連を考察する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 はじめに・オリエンテーション
- 第 2 回 デザインとはー生活とデザイン
- 第 3 回 デザインの現場 (1) 技術革新とデザイン
- 第 4 回 デザインの現場 (2) 情報とデザイン
- 第 5 回 デザインの現場 (3) まちづくりとデザイン
- 第 6 回 デザインの現場 (4) モノのデザイン
- 第 7 回 デザインの現場 (5) 国策とデザイン
- 第 8 回 デザインの現場 (6) 自動車とデザイン
- 第 9 回 デザインの現場 (7) 空間とデザイン
- 第 10 回 デザインの現場 (8) ファッションとデザイン
- 第 11 回 デザインの現場 (9) web とデザイン
- 第 12 回 デザインの現場 (10) 広告とデザイン
- 第 13 回 デザインの現場 (11) インテリアとデザイン
- 第 14 回 デザインの現場 (12) 書籍とデザイン
- 第 15 回 デザインの現場 (13) 公共建築とデザインーレポート課題

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施せず、レポート等を課す。
レポート 60%、授業後の意見レポート 40%、欠席、遅刻・早退を減点の対象とする。
美術館、ギャラリー、展覧会、デザイン関連イベント等への参加訪問は加点評価する。

[4] 教 材

筆記具、ノート等

色彩学 I		担当教員	はし 橋	もと 本	よう 洋	こ 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択			
演習	2 単位	1 年次通年	必修			

[1] 授業のねらい

生活の中で、色彩がいかに重要な役割を果たしているかを、多角的に考察し、色を単なる好みや流行で使うのではなく、合理的な使い方ができるように演習を通して学びます。
また、A・F・T 色彩検定試験(3級)にも対応しています。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 オリエンテーション (色彩学 I について)
- 第 2 回 光と色 光の性質と色 ～P12
- 第 3 回 " 目の仕組み・照明と色の見え方 ～P17
- 第 4 回 " 混色 ～P23
- 第 5 回 色の表示 色の三属性 ～P29
- 第 6 回 " PCCS ～P39
- 第 7 回 " 色名 ～P41
- 第 8 回 色彩心理 心理的効果 ～P47
- 第 9 回 " 色彩対比 ～P53
- 第 10 回 " 色彩同化 ～P55
- 第 11 回 " 知覚的効果 ～P61
- 第 12 回 色彩調和 色相に着目した配色 ～P75
- 第 13 回 " トーンに着目した配色 ～P81
- 第 14 回 " 配色の基本 ～P85
- 第 15 回 過去問題(2009 年度)体験 試験対策について
- 第 16 回 色彩効果 ～P93
- 第 17 回 色彩と生活 生活環境と色彩 ～P97
- 第 18 回 " ファッションと色彩 ～P105
- 第 19 回 " インテリアと色彩 ～P111
- 第 20 回 検定試験対策 (過去問題)
- 第 21 回 "
- 第 22 回 色彩検定 答え合せ
- 第 23 回 イメージの表現
- 第 24 回 " 1 (統一テーマ)
- 第 25 回 " 2 (自由テーマ)
- 第 26 回 主観的輪郭線
- 第 27 回 対比と同化
- 第 28 回 いろいろな同化効果
- 第 29 回 コントラストと立体効果
- 第 30 回 合評会 (課題提出最終日)

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
課題作品の審美性・独創性(70%)と、授業意欲等(30%)で総合評価。
欠席、遅刻は減点する。
未提出課題が有る場合の評価はDとする。
(止むを得ない理由がある場合は要相談のこと)

[4] 教 材

色彩検定公式テキスト3級編、配色カード、トータルカラー、カッターナイフ、
デザインカッター(替え刃も)、A4ケント紙、のり、コンパス、カッター専用定規(15cm・60cm
など)、カッターマット、絵の具、色鉛筆、カラーボールペン(白・黒・グレー・青・赤・緑
など)

[5] 参考図書

『デジタル色彩表現』(株式会社グラフィック社 2003)
『色彩デザイン』(株式会社グラフィック社 2006)
『色のしくみ』(株式会社新星出版社)
『色彩力』(ピエ・ブックス 2007)
『色彩検定 過去問題集』

デッサン I		担当教員	にし 西	お 尾	あきら 章
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択		
演習	2 単位	1 年次前期	必修		

[1] 授業のねらい

①面と立体を意識する目、②形態の観察力と描写力、③明暗の観察力と描写力、④質感の描写力の4つをより一層高めることをめざす。

[2] 授業の計画

第 1 回 人物の顔 1 人の観察の要点 (写真)

第 2 回 人物の顔 (写真) 作品提出① (採点)

第 3 回 人物全身の観察の要点 (写真で練習)

第 4 回 人物全身 1 人 (写真) 作品提出② (採点)

第 5 回 人物クロッキー 作品提出③ (採点)

第 6 回 直方体の基本練習

第 7 回 円筒形の基本練習

第 8 回 身の回りの事物の基本形について

※以下、7回は学生を座席指定して以下の7つのモチーフをローテーションで描く

第 9 回 器物 1 作品提出④ (採点)

第 10 回 器物 2 作品提出⑤ (採点)

第 11 回 器物 3 作品提出⑥ (採点)

第 12 回 器物 4 作品提出⑦ (採点)

第 13 回 器物 5 作品提出⑧ (採点)

第 14 回 器物 6 作品提出⑨ (採点)

第 15 回 器物 7 作品提出⑩ (採点)

[3] 評価の方法

実技中心となるため、作品で評価する。(作品 100 点)

[4] 教 材

学生持参：カルトン、クロッキー張、鉛筆 (4H～5B 全色)、クリップ、練り消し、消しゴム

[5] 参考図書

『鉛筆画ノート』視覚デザイン研究所編、視覚デザイン研究所

デッサンⅡ		担当教員	みなと 湊	しち 七	お 雄
授業の種類	単位数	配当学年・時期		必修・選択	
演習	2単位	1年次後期		選択	

[1] 授業のねらい

- 実習をとおして基礎的な素描力・造形力を高める
- 様々な素描材料について理解を深める
- 様々な素描作品・ドローイング作品について理解を深める

[2] 授業の計画

- 第 1 回 前半：スライドレクチャー（様々な素描・ドローイング作品を知る）
後半：手のデッサン（鉛筆、クロッキー帳） 作品提出
- 第 2 回 手の描写（極細水性ボールペン、B3 ケント紙） 作品提出①（採点）
- 第 3 回～第 4 回 細密模写（極細水性ボールペン、B3 ケント紙） 作品提出②（採点）
- 第 5 回 前半：スライドレクチャー（人物描写のポイントを知る）
後半：人物クロッキー 1（割箸、墨汁、クロッキー帳） 作品提出③（採点）
- 第 6 回 人物クロッキー 2（鉛筆、クロッキー帳） 作品提出④（採点）
- 第 7 回～第 8 回 人物デッサン（極細水性ボールペン、B3 ケント紙） 作品提出⑤（採点）
- 第 9 回～第 10 回 静物デッサン 1（鉛筆、四切画用紙） 器物の描写 作品提出⑥（採点）
- 第 11 回～第 12 回 自由テーマによるドローイング：ポップアートドローイング
（描画材料一式、画用紙、ボール紙） 作品提出⑦（採点）
- 第 13 回～第 14 回 静物デッサン 2（鉛筆、四切画用紙） 作品提出⑧（採点）
- 第 15 回 抽象ドローイング：目に見えないものを描く
（極細水性ボールペン、B3 ケント紙） 作品提出⑨（採点）

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。提出作品により評価する。ただし、出席して制作することに意義があるので欠席、遅刻、早退は減点の対象とする。

[4] 教 材

学生持参：カルトン、クロッキー張、ケント紙（B3 サイズ 5 枚）、画用紙（四切サイズ 3 枚）
鉛筆（4H～5B 全色）、極細水性ボールペン、クリップ、割箸、墨汁、練り消し、消しゴム

[5] 参考図書

視覚デザイン研究所編『鉛筆画ノート』（視覚デザイン研究所）
谷川 渥（監修）、小澤 基弘、渡辺 晃一（編集）『絵画の教科書』三晃書房

ベーシックデザイン I		担当教員	よしむら 吉村 はじめ
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	1 年次前期	必修

[1] 授業のねらい

デザインには柔軟な発想とその応用力、そして造形力が必要である。この授業では、ビジュアルコミュニケーションを中心に表現の多様性と柔軟なモノの見方を訓練し、グラフィックデザインの基礎を学習する。また、今まで学んできた既成概念を打ち破り再構築することによって、自己改革と、独創性を養う。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 200 字の作文、立方体の展開図
- 第 2 回 円柱のイメージ
- 第 3 回 //
- 第 4 回 形の簡略化
- 第 5 回 //
- 第 6 回 言葉を形に
- 第 7 回 //
- 第 8 回 点・線・面 平面構成
- 第 9 回 //
- 第 10 回 イメージボックス
- 第 11 回 //
- 第 12 回 機能の表現
- 第 13 回 //
- 第 14 回 情報の伝達
- 第 15 回 //

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。提出された課題作品の発想力、表現力、プレゼンテーション力などの創造性と欠席、授業の妨げになる行為を減点の対象として総合評価する。提出期限までに課題を提出しない場合は1つの課題につき10点減点。

[4] 教 材

デザイン用具一式、絵の具、A3 ケント紙約 10 枚など

[5] 参考図書

JAGDA 教科書『VISUAL DESIGN 第1巻～第5巻』(Graphic Design In Japan)
その他デザインに関する図書

[6] その他

課題の進行状況により宿題あり

ベーシックデザインⅡ		担当教員	はし 橋	もと 本	よう 洋	こ 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択			
演習	2単位	1年次後期	必修			

[1] 授業のねらい

1枚の紙から、150枚以上のチップから、立体造形を制作することで「形」への理解を深めると同時に、考える・想像する・構成する力を育みます。また、測る・切る・貼るの作業を通して、デザイン作業過程で必要な基本的道具の使い方を体験します。

[2] 授業の計画

- 第1回 ベーシックデザインⅡについて ペーパークラフト（1枚の紙から）
- 第2回 切って起こす形（円・三角・四角など）試作
- 第3回 " 構成して作品にする <課題Ⅰ>
- 第4回 " "
- 第5回 飛び出す形（基本形）試作
- 第6回 " <課題Ⅱ>
- 第7回 "
- 第8回 合評会（課題Ⅰ・課題Ⅱ）
- 第9回 基本の形と三面図について（球・立方体・円柱・円錐・三角錐・四角錐など）
- 第10回 美しい立方体をつくる <課題Ⅲ>
- 第11回 立方体（変形）をつくる <課題Ⅳ>
- 第12回 基本形 150枚以上で立体造形を創る <課題Ⅴ>
- 第13回 "
- 第14回 "
- 第15回 プレゼンテーションと合評（課題Ⅲ～課題Ⅴ）

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
 課題作品（70%）と、授業態度（30%）の割合で評価する。
 欠席、遅刻、早退及び授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教 材

スケッチブック（B4以上）、カッターナイフ・デザインカッター（替え刃も）、
 A3セント紙・3mm厚スチレンボード（学校売店で各自講入）、スチのり（授業時配付）、
 カッター専用定規（15cm・60cmなど）、カッターマット、コンパスなど

グラフィックデザイン I		担当教員	にし 西	ばた 畑	とし 敏	ひで 秀
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択			
演習	2 単位	1 年次前期	選択			

[1] 授業のねらい

この授業では、視覚デザインにおいて重要な表現要素の構成や創造力の基本的な力を養うための演習を行う。また緻密で正確な作業を自らの手で習得する訓練も兼ねる。パソコンでの操作に先立ち、発想や企画があつてこそその表現であること。また制作者自身の意図を持った文字の組み方や配色等基本的なルールについても学ぶ。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 はじめに・オリエンテーション／基礎デザイン課題 (1) 鉛筆・モノトーン
- 第 2 回 基礎デザイン課題 (2) デッサン-静物
- 第 3 回 基礎デザイン課題 (3) デッサン-有機体
- 第 4 回 基礎デザイン課題 (4) フリーハンド-カーブ定規デザイン
- 第 5 回 基礎デザイン課題 (5) タイルパターンデザイン
- 第 6 回 基礎デザイン課題 (6) 水彩-細密描写
- 第 7 回 基礎デザイン課題 (7) アクリルガッシュ-カラスロ・平塗り練習
- 第 8 回 基礎デザイン課題 (8) 色相・明度
- 第 9 回 基礎デザイン課題 (9) 分割・カラートーン構成
- 第 10 回 基礎デザイン課題 (10) 平面構成-抽象イメージ
- 第 11 回 基礎デザイン課題 (11) 平面構成-音のイメージ
- 第 12 回 基礎デザイン課題 (12) 平面構成-季節のイメージ
- 第 13 回 基礎デザイン課題 (13) 平面構成-スポーツのイメージ
- 第 14 回 基礎デザイン課題 (14) 写真トリミング・構成デザイン
- 第 15 回 基礎デザイン課題 (15) ネーミング企画・キャラクターデザイン

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しない。
 実技が中心となるため授業毎に課題を制作する。
 授業課題作品 100%、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

特になし。

ファッションデザイン I		担当教員	まえ だ ひろ こ 前 田 博 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

衣服における基礎縫製技術を習得する。店頭、雑誌などの情報ツールより市場リサーチを行ったうえで、オリジナルのファッションアイテムを制作する。また、既存のアイテムを再加工することにより、発想力を高め、表現能力の向上を目標とする。

また、基礎的な洋服の成り立ちを理解することを達成目標とする。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 オリエンテーション
- 第 2 回 基礎縫製(1)
- 第 3 回 " (2)
- 第 4 回 " (2)
- 第 5 回 流行予測マップの作成
- 第 6 回 " 発表
- 第 7 回 パターンメイキング キャミソール制作(1)
- 第 8 回 " " (2)
- 第 9 回 " " (3)
- 第 10 回 " " (4)
- 第 11 回 ファッションアイテムのリメイク(1)
- 第 12 回 " (2)
- 第 13 回 " (3)
- 第 14 回 " (4)
- 第 15 回 まとめ 合評と評価

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

提出課題 80%、授業態度 20%の割合で評価する。

欠席、遅刻、早退及び授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教 材

スケッチブック、裁縫道具、筆記用具など制作に必要なものは各自で準備。

[5] 参考図書

必要に応じて配布する。

生活造形 I		担当教員	まえ だ ひろ こ 前 田 博 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

衣服に欠くことのできないテキスタイル制作を通じて、幅広い技術を習得する。これらの技術を生かし、生活の中で使えるものをつくる。表現することの喜びを知り、考えることの重要性を把握すること、「染め」技法の習得することを達成目標とする。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 テキスタイルの基礎知識 (1)
- 第 2 回 " (2)
- 第 3 回 " (3)
- 第 4 回 " (4)
- 第 5 回 テキスタイル制作：染料について
- 第 6 回 " : 引染技法 (1)
- 第 7 回 " : " (2)
- 第 8 回 " : " (3)
- 第 9 回 " : 絞染技法 (1)
- 第 10 回 " : " (2)
- 第 11 回 " : " (3)
- 第 12 回 " : プリント技法 (1)
- 第 13 回 " : " (2)
- 第 14 回 " : " (3)
- 第 15 回 まとめ 合評と評価

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
提出課題 80%、授業態度 20%の割合で評価する。
欠席、遅刻、早退及び授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教 材

スケッチブック、裁縫道具、筆記用具など制作に必要なものは各自で準備。

[5] 参考図書

必要に応じて配布する。

生活造形Ⅱ		担当教員	まえ だ ひろ こ 前 田 博 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

衣服に欠くことのできないテキスタイル制作を通じて、幅広い技術を習得する。これらの技術を生かし、生活の中で使えるものをつくる。各々の技術を学ぶ中で、ものの成り立ちを理解し、表現の幅を広げる。

また、「織り」「編み」「不織」の技法を習得することを達成目標とする。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 テキスタイルの基礎知識 (1)
- 第 2 回 " (2)
- 第 3 回 " (3)
- 第 4 回 テキスタイル制作：素材について
- 第 5 回 " : 平織
- 第 6 回 " : 綾織
- 第 7 回 " : 朱子織
- 第 8 回 " : 編み (1)
- 第 9 回 " : " (2)
- 第 10 回 " : " (3)
- 第 11 回 " : フェルトメイキング (1)
- 第 12 回 " : " (2)
- 第 13 回 " : " (3)
- 第 14 回 " : " (4)
- 第 15 回 まとめ 合評と評価

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

提出課題 80%、授業態度 20%の割合で評価する。

欠席、遅刻、早退及び授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教 材

スケッチブック、裁縫道具、筆記用具など制作に必要なものは各自で準備。

[5] 参考図書

随時参考図書を紹介。

地域環境論		担当教員	うちやまひでき 内山秀樹
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	1年次前期	必修

[1] 授業のねらい

心豊かな生活を送る上で住空間の質が重要なと同様に、まちの美しさ、魅力、活力など地域コミュニティや地域環境の豊かさも非常に重要である。

この講義は以下の3点を学習目標とし、これからの時代に求められる社会性と行動力を備えた人間形成の一助とする。

- ①地域の特性とまちづくりの取り組みについての理解を深める。
- ②どんなまちが美しいのか、どんなまちが魅力的なのかの理解を深める。
- ③魅力的なまち、活力あるまちにするための企画を立て、実行する力を高める。

[2] 授業の計画

- 第1回 ガイダンスー地域環境論について
- 第2回 まちの生い立ちと魅力資源
- 第3回 まちはどのように作られ、育まれるのか
- 第4回 プレゼン1：我がまちの生い立ちとまちづくりの取り組み(レポート1)
- 第5回 まちの魅力(1)：景観
- 第6回 " (2)：花と緑
- 第7回 " (3)：賑わい
- 第8回 " (4)：歴史と伝統
- 第9回 " (5)：アート
- 第10回 プレゼン2：私が感動したまちづくり(レポート2)
- 第11回 グループワーク(1)：まちづくりプロジェクトの企画
- 第12回 " (2)： "
- 第13回 フィールドワーク(1)：プロジェクトの実行
- 第14回 " (2)： "
- 第15回 講義のまとめ(レポート3：まちづくりプロジェクトに参画して)

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
レポートとプレゼン約80%、ふりかえりシート(受講姿勢)20%のウェイトで評価。
欠席、遅刻、早退及び授業の妨げになる行為(私語、携帯電話など)は減点する。

[4] 教 材

適宜、必要資料、プリントを配布する。

[5] 参考図書

- 進士五十八他『風景デザイン 感性ボランティアのまちづくり』(学芸出版社 1999)
- 藤岡作太郎『花と緑のまちづくり』(学芸出版社 2005)
- 服部圭郎『人間都市クリチバ』(学芸出版社 2004)
- 上甫木昭春『地域生態学からのまちづくり』(学芸出版社 2009)

[6] その他

私語が目立つ場合は座席指定とする。机上には授業に関係ないかばん等を置くことを禁ずる。

環境デザイン概論		担当教員	うちやまひでき 内山秀樹
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	1年次後期	選択

[1] 授業のねらい

前期の地域環境論からの次のステップの環境デザイン分野の学習として、魅力的な都市環境を形成する上で重要な要素のデザインについて具体的な事例や手法を学ぶ。具体的には道と川、公園・広場、住宅地、公共空間、サイン、コミュニティデザインなどについて学ぶ。また、これらをテーマとしてグループでの実践学習、調査、提案なども行う。まちづくりの分野に関心がある方は必須の授業である。

[2] 授業の計画

- 第 1回 環境デザインとは？
- 第 2回 道と川のデザイン
- 第 3回 公園や広場のデザイン(レポート1)
- 第 4回 住宅地のデザイン
- 第 5回 ガーデニング講座(1)
- 第 6回 " (2)
- 第 7回 ガーデニング体験(1)
- 第 8回 " (2)(レポート2)
- 第 9回 まちづくりプロジェクトの企画(1)
- 第10回 " (2)
- 第11回 まちづくりプロジェクトの実行(1)
- 第12回 " (2)
- 第13回 ライティング
- 第13回 サイン計画
- 第14回 パブリックアート
- 第15回 わが町のサイン計画プレゼン(レポート3)

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
レポートと課題約80%、ふりかえりシート(受講姿勢)20%のウェイトで評価。
欠席、遅刻、早退及び授業の妨げになる行為(私語、携帯電話など)は減点する。

[4] 教材

必要に応じて資料を配布する。

[5] 参考図書

鳴海邦碩他『都市デザインの手法』、全国町並み保存連盟『新・まちなみ時代』
藤岡作太郎『花と緑のまちづくり』、服部圭郎『人間都市クリチバ』(以上、学芸出版社)
延藤安弘『何をめざして生きるんや』(プレジデント社)
『コミュニティガーデンのすすめ』(財)都市緑化基金
『図解ガーデニングのコツ』(小学館2003)

[6] その他

私語が目立つ場合は座席指定とする。机上には授業に関係ないかばん等を置くことを禁ずる。

インテリアデザイン		担当教員	まつ 松 むら 村 たか 孝 こ 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

快適な住空間〈アメニティ〉の創造を目標として、単なる色彩や形の創作からのインテリアではなく、一歩進みライフスタイルから必要とされるアイテムやエレメントなどを色彩、歴史、服飾、アートなど様々な方向から学びそして選び、視覚化するためのプレゼンテーションの手法を身に付けて行きます。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 エレメントからインテリアへ、服飾とインテリア
- 第 2 回 食卓とインテリア
- 第 3 回 アートとインテリア
- 第 4 回 グリーンとインテリア
- 第 5 回 家具とインテリア
- 第 6 回 照明とインテリア
- 第 7 回 設備機器とインテリア
- 第 8 回 内装材とインテリア
- 第 9 回 窓まわりとインテリア
- 第 10 回 ハンドクラフトとインテリア
- 第 11 回 雰囲気とインテリア
- 第 12 回 私の部屋のデザイン
- 第 13 回 エレメントの選択
- 第 14 回～第 15 回 プレゼンテーションボード制作

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しない。
授業への取組み 50%、レポート・課題提出 50%で評価。

[4] 教 材

(社)インテリア産業協会『生活デザインとインテリア』（産能大学出版部）
資料などのプリント配布。

[5] 参考図書

その都度紹介します。

[6] その他

特になし。

すまいの計画		担当教員	うちやまひでき 内山秀樹
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	1年次後期	選択

[1] 授業のねらい

すまいは、一般的に生涯の中で最も大きな買い物である。この講義はすまいやインテリアコーディネート分野を業とするものが備えるべき家づくりの専門的知識やスキルとして以下の3点を学ぶことを目標とする。

- ①住宅やインテリアコーディネートに関する専門的視知識を高める。
- ②透視図法の知識と作図法を会得する。
- ③プランニングソフトによるすまいのプランニングのスキルを高める。

[2] 授業の計画

- 第 1回 家づくりの手順
- 第 2回 ライフスタイルにあった住まい
- 第 3回 家づくりの基礎知識、建築基準法
- 第 4回 住まいの計画(1)LDK, プライベートルーム, サニタリー、収納
- 第 5回 " (2)玄関、エクステリア、2世代住宅のプランニング
- 第 6回 " (3)キッチン、バス、トイレ、窓
- 第 7回 " (4)照明、建具、内外装、エクステリア(課題1)
- 第 8回 室内パースを描く(1)透視図法概論、パースグリッドの使い方
- 第 9回 " (2)パースグリッドによる簡単なDKの作図
- 第10回 " (3)DKの仕上げ(課題2)
- 第11回 すまいのプランニング(1)ソフトの使い方(課題3)
- 第12回 " (2)建て替え計画の企画ゾーニング、平面図
- 第13回 " (3)インテリア、設備の検討
- 第14回 " (4)エクステリア、資金計画
- 第15回 「わが家の建て替え計画」のプレゼンと講評(課題4)

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
レポートと課題約80%、ふりかえりシート(受講姿勢)20%のウェイトで評価。
欠席、遅刻、早退及び授業の妨げになる行為(私語、携帯電話など)は減点する。

[4] 教 材

『初めての家づくり基本レッスン』(主婦の友社)
『3DマイホームデザイナーLS2 スーパーテクニクガイド』(株式会社エクスナレッジ)

[5] 参考図書

編集委員会『はじめての建築法規』(学芸出版社2000)
林 知子他『住まい方から住空間をデザインする』(彰国社2000)

[6] その他

私語が目立つ場合は座席指定とする。机には授業に関係ないかばん等を置くことを禁ずる。

住環境論		担当教員	は ば ち ひろ 羽 場 千 尋
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

高齢社会が加速度的に進む中、高齢者の医療・福祉、介護保険、雇用、年金、生活環境など様々な政策が講じられ、お年寄りや障害者が安全で快適に生活でき、かつ自立を促すことが出来る住環境づくりが求められている。この講義はこれらのニーズに応えられる人材育成を目的とし、高齢者福祉、障害者福祉の視点から住環境のあり方を学ぶ。

住まい、インテリア関連分野を目指す方は必須である。「福祉住環境コーディネーター3級」の資格取得を目指す。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 オリエンテーション：福祉住環境コーディネーターとは
- 第 2 回 少子高齢社会と共生社会への道
福祉住環境整備の重要性・必要性
- 第 3 回 住宅生活の維持とケアサービス
- 第 4 回 健康と自立
- 第 5 回 障害者が生活の不自由を克服する道
バリアフリーとユニバーサルデザインを考える
- 第 6 回 生活を支えるさまざまな用具
- 第 7 回 理解度確認テスト 1
- 第 8 回 安全で快適な住まい 1
- 第 9 回 安全で快適な住まい 2
- 第 10 回 理解度確認テスト 2
- 第 11 回 ライフスタイルの多様化と住まい
- 第 12 回 安心できる住生活支援
- 第 13 回 安心して暮らせるまちづくり
- 第 14 回 理解度確認テスト 3
- 第 15 回 学外講義（県介護実習・普及センターでの体験学習）

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。

試験約 50%、3 回の理解度確認テスト約 40%、授業への取り組み（欠席、遅刻早退は減点）約 10%で評価する。

[4] 教 材

1. 『福祉住環境コーディネーター検定試験 3 級公式テキスト』（東京商工会議所）
2. 『福祉住環境コーディネーター3 級検定試験 過去 5 回問題集』（成美堂出版）

※最新版を使用するが、入学時には発行されていない可能性が高いため、発行され次第、連絡する。その他、適宜プリント、プロジェクターなどを用いる。

[5] 参考図書

福祉住環境コーディネーター用語辞典、他関連図書は多数出版され、本学図書館にも所蔵している。

[6] その他

私語、居眠りなど、他人の学習意欲を妨げるものは退室とする。

生活科学論		担当教員	かとうたかお 加藤隆夫
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	1年次前期	必修

[1] 授業のねらい

衣・食・住・環境は生活の基盤をなすものであるが、近年の急速な科学技術の進歩は物やサービスを身近に溢れさせ、人と生活を支える手段とのかかわり方を根底から覆す状況を招いている。一方では、大量生産、大量消費が資源やエネルギーの消耗を加速し、地球環境に壊滅的な危機をもたらしつつある。こうした中で生活の質を考えていくためには、あらためて自らの存在やその由来についての考察を通じた、生活を持続可能なものとしていく視点が欠かせない。

生活科学とは、生活の改善・向上を目的とし、人間と環境の相互作用について人的・物的両面から研究し、あわせて人類福祉への貢献を目指す総合的な科学である。本授業はその入門的なものと位置づけ、生活関連事象を自然科学的に捉え、基礎的な視点から考察する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 生活と科学
- 第 2 回 食生活と栄養
- 第 3 回 食生活と栄養素のバランス
- 第 4 回 食品の衛生
- 第 5 回 人体のしくみと機能
- 第 6 回 すまいと生活
- 第 7 回 すまいと環境
- 第 8 回 衣と生活（人間と衣服）
- 第 9 回 快適な衣環境
- 第 10 回 生活と洗浄
- 第 11 回 健康と病気予防
- 第 12 回 資源とエネルギー
- 第 13 回 地球環境の悪化
- 第 14 回 環境汚染
- 第 15 回 廃棄物処理（有害物質、リサイクル）

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。なお、授業期間中にレポートを提出することがある。

試験：記述式、持ち込み不可

試験（レポート含む）100点、欠席、遅刻、早退は減点する。

※授業開始後、5分以上の遅刻は欠席とする。

[4] 教 材

プリント資料を配布する。

衣生活論		担当教員	おか だ みず ほ 岡 田 瑞 穂
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次前期	必修

[1] 授業のねらい

現代科学の先端技術を駆使した新素材の開発や、既製服の多様化、個性化により、わたしたちの衣生活は大きく変化するとともに大変豊かになった。こうした時代にあってわたしたち消費者は、各自が衣服を選択、購入し美しく健康に着用管理するなど、日常的な衣生活活動を地球的な視野から健全に営むことのできる、自立した賢い生活者となり、また、これまでの衣生活文化を理解し、伝統と変革のバランスを考えながら、国際化が一層進むであろうこれからの衣生活の充実、向上を図ることをねらいとしている。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 衣服と心理 1. 現代生活と衣服 (1) 個人、社会生活と衣服
- 第 2 回 2. 衣文化の変容 (1) 衣服形態、色彩の意味と象徴性 (2) 服飾の変遷
◎ビデオ「服装のルーツ」
- 第 3 回 3. 服飾表現のメッセージ (1) 現代服飾の動向 (2) 色彩による感情効果
◎ビデオ「服装のルネッサンス」
- 第 4 回 衣服の造形と着装 1. 被服の機能 2. 人体の形態と衣服の造形
- 第 5 回 3. 被服の構成 (1) 平面構成 (2) 立体構成 (3) 被服造形的基本的方法
- 第 6 回 4. 着衣の衛生と生活活動 (1) 温熱の調節 (2) 身体の拘束性
- 第 7 回 5. これからの着装行動 (1) 衣生活の成り立ち (2) これからの衣生活
(3) 高齢化時代と着装 (4) 環境と着装行動
◎ビデオ「和服の歴史」
- 第 8 回 衣服の素材 1. 繊維素材 (1) 繊維の種類、性能、用途
2. 構造物としての糸や布 (1) 糸 (2) 織物と編物
- 第 9 回 3. 素材の染色と加工 (1) 素材の染色と加工 (2) 仕上げ加工と素材
- 第 10 回 衣服の衛生、管理と環境 1. 人体の衛生、保護と衣服 (1) 人体の汚れと保護
- 第 11 回 2. 衣服の管理 (1) 洗濯 (2) しみ抜き、漂白 (3) 仕上げ、保管
◎ビデオ「被服の管理」
- 第 12 回 衣服と消費者の自立 1. 衣服の選択、購入と情報の活用
- 第 13 回 2. 「衣」の消費者問題と対応 (1) 衣をめぐる消費者問題
- 第 14 回 3. 衣服の生産、消費と廃棄の問題 (1) ワードローププランと廃棄
- 第 15 回 衣生活における諸課題についてレポート提出

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。試験 80 点、授業中の課題 20 点 (10 点×2 回)、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

内藤道子他『衣生活論』(建帛社 2008)

[5] 参考図書

島崎恒蔵・佐々井啓『衣服学』(朝倉書院 2009)、佐々井啓『衣生活学』(朝倉書院 2007)
田村照子『衣環境の科学』(建帛社 2007)

食生活論		担当教員	<small>まし</small> 岸	<small>まつ</small> 松	<small>しず</small> 静	<small>よ</small> 代
授業の種類	単位数	配当学年・時期		必修・選択		
講義	2 単位	1 年次後期		選択		

[1] 授業のねらい

健康で豊かな食生活は、必ずしも豪華な食事を毎日摂るものではなく、自分の価値観に基づくライフスタイルにあった食べ物、食べ方を選択し築き上げるものである。一人ひとりの食に関する価値観の確立に資することを目的に、食生活の在り方に大きく影響を及ぼしている諸問題について学んでいく。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 食生活とは
- 第 2 回 日本の食生活の歴史（古代～江戸時代）
- 第 3 回 日本の食生活の歴史（明治～現代）
- 第 4 回 日本の食文化
- 第 5 回 現代の食の問題点
- 第 6 回 食の機能と役割（炭水化物、脂質）
- 第 7 回 食の機能と役割（タンパク質、無機質、ビタミン）
- 第 8 回 食品と調理
- 第 9 回 食と健康
- 第 10 回 何を、いつ、どれだけ食べるか
- 第 11 回 国際化と食糧問題
- 第 12 回 日本の食糧問題
- 第 13 回 食と環境
- 第 14 回 住まいの中の食空間
- 第 15 回 食べ物の調理・加工

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。
 欠席、遅刻、早退、および授業を妨げる行為（私語、携帯電話など）は減点とする。

[4] 教 材

教科書は使用しない。プリントを配布する。

[5] 参考図書

遠藤金次・橋本慶子編『食生活論－「人と食」のかかわりから－改訂第2版』（南江堂 2003）
 福田靖子・小川宣子編『食生活論』第3版（朝倉書店 2009）

住生活論		担当教員	うち やま ひで き 内 山 秀 樹
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	1年次前期	選択

[1] 授業のねらい

住まいは、人間にとって最も基本的な生活空間であり、一生のうち最も多くの時間をここで過ごしている。住まいの良し悪しは、心身の健康はもとより、子供の成長発達や家族生活の安定、高齢者の自立など、安心・安全な生活に大きく影響する。

この講義で学習目標は以下の通りである。

- ①「眠る」、「食べる」、「着る」、「入浴・排泄」などの生活行為そのものを科学的に理解する。
- ②上記の生活行為を豊かにするために求められるすまいのあり方について理解する。

なお、この授業はすまいのプランニングやインテリア関連分野を目指す方にとっては導入部の基本的なものであるため、必修の授業である。

[2] 授業の計画

- 第 1回 授業ガイダンス：住生活論とは？
- 第 2回 人と生活(レポート1：わが家の間取りとわが家のライフスタイル)
- 第 3回 眠りの空間(1) 眠りの生理と快適な眠りの環境
- 第 4回 " (2) 就寝様式の変遷とその空間計画
- 第 5回 食事の空間(1) 食事様式と食事環境の変遷
- 第 6回 " (2) 食事空間、調理空間の計画
- 第 7回 着る 快適な着衣環境と衣服の収納計画(レポート2)
- 第 8回 水回り空間(1) 入浴排泄の様式の変遷
- 第 9回 " (2) 入浴排泄空間の計画
- 第10回 つきあい空間(1) つきあい空間の歴史
- 第11回 " (2) つきあい空間の計画
- 第12回 子育てと住まい(1) 子どもの発達とすまい
- 第13回 " (2) 子ども部屋の計画(レポート3)
- 第14回 お年寄りが暮らしやすい住まい
- 第15回 講義のまとめ：人と環境にやさしいすまい手になろう

[3] 評価の方法

レポートと試験期間中の試験とで評価する。

試験 60%、レポート 30%、ふりかえりシート(受講姿勢)10%のウェイトで評価。

欠席、遅刻、早退及び授業の妨げになる行為(私語、携帯電話など)は減点する。

[4] 教 材

林 知子他『住まい方から住空間をデザインする』(彰国社 2000)

[5] 参考図書

後藤 久監修『住居学入門』(実教出版社 1999)、住田昌二編『現代の住まい 基礎住居学』(光生館 1986)、岸本幸臣『図説テキスト 住居学』(彰国社 1997)、小澤紀美子編『豊かな住生活を考える－住居学』(彰国社 2002)

[6] その他

私語が目立つ場合は座席指定とする。机上には授業に関係ないかばん等を置くことを禁ずる。

生活情報論		担当教員	ふじ 藤 原 正 敏
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次前期	必修

[1] 授業のねらい

現在は、「知的基盤社会」とも言われており、情報通信技術を活用した情報能力が求められております。情報の概念を学び、生活を情報という視点から具体的な事例を通して、情報の収集・整理・蓄積・加工・処理・発信の重要性について学びます。具体的には、学生生活を通して情報能力（聴く、読む、調べる、整理する、表現する、伝える、考える）の育成を目指します。社会人として情報社会を快適に過ごせることを目標とします。

まず、情報の概念を理解し、情報の活用について具体的な事例を通して学びます。履修科目を例に、解決すべき問題を取り上げ、情報活動を行い、情報能力を身につける。情報通信技術の活用による情報活動、その利点や課題についても理解し、情報社会における個人の役割と責任についても学びます。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 生活情報論について
- 第 2 回 情報の概念、情報社会の進展
- 第 3 回 情報の活用について－1（収集、整理、蓄積、管理）
- 第 4 回 情報の活用について－2（加工、表現）
- 第 5 回 情報の活用について－3（発信、交換、責任、評価）
- 第 6 回 情報活動について－1（聴く、読む、調べる）
- 第 7 回 情報活動について－2（整理する、まとめる、書く）
- 第 8 回 情報活動について－3（表現する、伝える、考える）
- 第 9 回 情報源、データベースについて
- 第 10 回 問題解決について
- 第 11 回 問題解決のための情報活動
- 第 12 回 情報通信技術を活用した情報活動
- 第 13 回 情報伝達の多様化と社会の変化
- 第 14 回 情報社会のもたらす影響と課題
- 第 15 回 情報社会における個人の役割と責任

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施する。
4 回の課題提出、定期試験を 1 : 1 の割合で評価する。

[4] 教 材

藤原正敏他『ネットワーク社会における情報の活用と技術』三訂版（実教出版）
藤原正敏他『ネットワーク社会における情報の活用と技術』三訂版 学習ノート（実教出版）

[5] 参考図書

Web教材、配布プリント

情報システム I		担当教員	ひら 平	つか 塚	こういちろう 紘一郎
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択		
講義	2 単位	1 年次前期	必修		

[1] 授業のねらい

企業等において自らの業務改善や仕事の処理のためにコンピュータを活用するエンドユーザコンピューティングが重要視されてきている。パーソナルコンピュータやソフトウェアの利用方法のみならず、業務との関わりを含む総合的な知識が求められている。講義を通じて、コンピュータや周辺機器の構成・動作原理・関連する用語の意味などについて学習する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 講義概要とコンピュータについて
- 第 2 回 コンピュータの基本的な仕組み
- 第 3 回 2 進数・16 進数について
- 第 4 回 2 進数・10 進数・16 進数の相互変換
- 第 5 回 情報関連の単位と接頭辞
- 第 6 回 各種入力装置の種類、特徴と用途
- 第 7 回 各種出力装置の種類、特徴と用途
- 第 8 回 デジタル情報のデータ表現方法
- 第 9 回 主記憶装置の役割と仕組み
- 第 10 回 補助記憶装置役割と仕組み
- 第 11 回 CPU の種類と仕組み
- 第 12 回 各種インターフェースの特徴と用途
- 第 13 回 OS の役割など
- 第 14 回 様々なアプリケーションソフトの紹介
- 第 15 回 様々なファイル形式と関連するアプリケーションについて

[3] 評価の方法

試験期間中の試験およびレポートにて評価する。

試験 80 点

レポート 20 点

欠席・遅刻・早退および授業進行の妨げとなる行為は減点とする。

[4] 教 材

プリントの配布、e-Learning 教材。

堀本 勝久・大島 邦夫『2010-'11 年版 最新パソコン・IT 用語辞典』（技術評論社 2010）

岡嶋 裕史『平成 23 年度 [春期][秋期]IT パスポート試験合格教本』（技術評論社 2010）

[5] 参考図書

「IT パスポート試験」に関連する書籍および問題集など

情報システムⅡ		担当教員	ふじ 藤	わら 原	まさ 正	とし 敏
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択			
講義	2単位	1年次後期	必修			

[1] 授業のねらい

前期「情報システム1」（コンピュータ中心の内容）を受けて、この科目では、高度情報化社会を支える情報通信システムの基本を学ぶ。インターネットのしくみ、セキュリティ対策、情報端末のしくみについて理解を深め、これらが社会でどのような役割を果たしているかを具体的な例を通して履修し、情報通信技術の習得をめざす。

まず、情報の本質を理解し、その伝え方が歴史とともに変わってきたことを学ぶ。日常的に利用しているインターネットについて、それを支える基本的な技術や仕組みを理解する。そのための情報のデジタル化について学ぶ。情報通信技術を活かしたサービスやその仕組みについて学び、進展は目覚ましい高度情報化社会を展望し、その活用法を考察する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 情報の伝え方の歴史
- 第 2 回 情報の表現- アナログとデジタル-
- 第 3 回 情報通信技術とコンピュータ
- 第 4 回 さまざまな情報通信サービス、インターネットとは
- 第 5 回 情報ネットワークのしくみ
- 第 6 回 WWW のしくみ、メールシステムのしくみ
- 第 7 回 通信プロトコルについて：TCP/IP、IP アドレス
- 第 8 回 階層構造のメリット、OSI 参照モデル
- 第 9 回 TCP/IP によるデータ通信
- 第 10 回 ネットワークの経路、IP アドレス、MAC アドレス
- 第 11 回 ファイル共有、プリンタ共有
- 第 12 回 インターネットを支える技術
- 第 13 回 ネットワークを安全に利用するために-セキュリティ、ネチケット-
- 第 14 回 モバイル情報端末、クラウドコンピューティング
- 第 15 回 ネットワーク社会の現状と今後、ユビキタス社会について

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。

4 回の課題提出、定期試験を 1 : 1 の割合で評価する

[4] 教 材

配布プリント

『ネットワーク社会における情報の活用と技術』（実務出版）

『カラー版 徹底図解 パソコンのしくみ』（新星出版社）

[5] 参考図書

『最新パソコン用語事典』（技術評論社）

『コンピュータのしくみ』（実務出版）

『初歩からのネットワーク』など。

情報処理演習 I		担当教員	たなか よういち 田 中 洋 一
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次前期	必修

[1] 授業のねらい

大学及び職場にて、情報を収集、分析、整理・保管、表現する各プロセスにおける必要な力を学ぶとともに、運用する上で大切な情報倫理を身につける。これらを通して、実践の場での ICT によるコミュニケーション能力・問題解決力が高まることを目的とする。1 回目授業において、情報活用力診断テスト Rasti を受験することにより、就職を見据え、大学で学ぶべきことを確認する。

情報受信、情報発信、情報検索、表計算、データ管理、プレゼンテーション等、実践の場にて情報を扱う知識やスキルを学ぶ。授業終了後の定期試験にて、再度 Rasti を受験することで、半期で身につけた情報活用力を確認する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 ガイダンス、プレテスト
- 第 2 回 タッチタイピング、電子メール 1（登録、作成、送信、受信、返信）
- 第 3 回 電子メール 2（転送・フィルタ、添付）
- 第 4 回 インターネット（Web、SNS、ブログ）
- 第 5 回 情報検索
- 第 6 回 情報倫理（著作権、肖像権、個人情報）、情報セキュリティ
- 第 7 回 表計算 1（数式、セル参照、関数）
- 第 8 回 表計算 2（グラフ）
- 第 9 回 データベース
- 第 10 回 ファイル・データ管理
- 第 11 回 文書表現
- 第 12 回 ビジュアル表現
- 第 13 回 プレゼンテーションの基本
- 第 14 回 プレゼンテーション資料作成 1
- 第 15 回 プレゼンテーション資料作成 2

[3] 評価の方法

試験期間中の Web 試験を 50%、毎回の課題を 30%、タッチタイピング 10%、入力テストを 10%で評価します。ただし、欠席・遅刻・早退、授業態度により、減点する場合があります。詳細は、第 1 回目のガイダンスで説明します。

[4] 教 材

e-Learning 教材、『情報活用力』（noa 出版 2008）、
タイピングソフトウェア TypeQuick USB 版（日本データパシフィック）、
情報活用力診断テスト Rasti（大阪商工会議所、NPO 法人 ICT 利活力推進機構）

[5] 参考図書

その他、市販の Windows 7、Microsoft Office 2010 関連書籍を参考にしてください。

[6] その他

質問等がある場合は、研究室前に掲示してあるオフィスアワー等を利用するか、電子メールで連絡してください。

情報処理演習Ⅱ		担当教員	ひらつか こういちろう 平塚 紘一郎
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次後期	必修

[1] 授業のねらい

コンピュータが身近なものとなり、個人の情報管理や企業における事務処理には必要不可欠な道具となっています。表計算を利用した計算処理およびデータ管理を学び、業務を効率的に行える能力を身につけてほしい。実用的な表計算ソフトウェア操作の修得を目的とし、MOS (Microsoft Office Specialist) Excel 資格の取得を目指します。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 オートフィルと入力規則
- 第 2 回 ワークシートの管理と書式設定
- 第 3 回 行、列の編集とセルの書式設定
- 第 4 回 テーブルの書式設定と数式、関数、小計
- 第 5 回 条件付き数式と条件付き論理
- 第 6 回 グラフの作成と書式設定、編集
- 第 7 回 条件付き書式と図の挿入
- 第 8 回 データの並べ替え、集計
- 第 9 回 ブックの変更履歴管理、保護、共有
- 第 10 回 ブックの配布と印刷設定
- 第 11 回 資格試験対策 1 (第 1 回模擬試験)
- 第 12 回 資格試験対策 2 (第 2 回模擬試験)
- 第 13 回 資格試験対策 3 (第 3 回模擬試験)
- 第 14 回 資格試験対策 4 (第 4 回模擬試験)
- 第 15 回 資格試験対策 5 (第 5 回模擬試験)

[3] 評価の方法

試験期間中の試験および隔週のレポートで評価する。

試験 70 点

レポート 30 点

欠席・遅刻・早退および授業進行の妨げとなる行為は減点とする。

[4] 教 材

『Microsoft Office Specialist Microsoft Excel 2010 公認テキスト&問題集』
(FOM 出版 2011)

[5] 参考図書

Microsoft Excel に関連する書籍および問題集など

プログラミング I		担当教員	たなか よういち 田 中 洋 一
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次前期	必修

[1] 授業のねらい

HTML、CSS、JavaScript を用いた Web やクイズ等の制作を通して、プログラミング（コーディング）の基本を学ぶ。

前半は、HTML、CSS を用いた Web 制作を通して、16 進数やコーディングの基本を学ぶ。後半は、JavaScript を用いて、変数、関数、処理の繰り返し、条件分岐等、アルゴリズムの基本を学ぶ。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 ガイダンス、プログラミング（コーディング）とは
- 第 2 回 HTML の基礎（文章の構造化）
- 第 3 回 CSS の基礎（装飾のつけ方）
- 第 4 回 色（RGB）、行間、文字の装飾
- 第 5 回 リンク
- 第 6 回 画像の表示
- 第 7 回 箇条書き（リスト）
- 第 8 回 表
- 第 9 回 JavaScript の基礎（オブジェクト、プロパティ、メソッド）
- 第 10 回 変数、演算子
- 第 11 回 処理の繰り返し
- 第 12 回 条件分岐
- 第 13 回 フォームを用いた課題
- 第 14 回 制作課題 1
- 第 15 回 制作課題 2

[3] 評価の方法

課題を 60%、試験期間中の筆記試験を 40%で評価します。

ただし、欠席・遅刻・早退、授業態度により、減点する場合があります。

詳細は、第 1 回目のガイダンスで説明します。

[4] 教 材

e-Learning 教材

[5] 参考図書

『みるみるマスターHTML&スタイルシート 作れる！わたしの Web サイト』（今村勇輔，エクスナレッジ 2009）、『よくわかる ゼロからはじめる JavaScript』（FOM 出版 2006）、

その他、市販の HTML、XHTML、CSS、JavaScript に関する書籍を参考にしてください。

[6] その他

質問等がある場合は、研究室前に掲示してあるオフィスアワー等を利用するか、電子メールで連絡してください。

プログラミングⅡ		担当教員	ひらつかこういちろう 平塚紘一郎
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次後期	必修

[1] 授業のねらい

論理的思考力や問題解決能力といった力は、仕事をする上で非常に重要となる。また、前者はコミュニケーションを行う上でも重要となる。プログラミング言語の Visual Basic を用いて Windows プログラミングの基礎を学ぶとともに、論理的思考力や問題解決能力をプログラミングの過程を通して養ってもらう。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 講義概要とプログラミングの基礎
- 第 2 回 Visual Basic の基本操作とコントロール
- 第 3 回 プロパティ
- 第 4 回 文字列の表示と操作
- 第 5 回 変数の型と利用
- 第 6 回 演算子や算術関数の利用
- 第 7 回 条件分岐
- 第 8 回 条件分岐の練習問題
- 第 9 回 繰り返し
- 第 10 回 繰り返しの練習問題
- 第 11 回 プロシージャ
- 第 12 回 プロシージャの練習問題
- 第 13 回 総合練習問題
- 第 14 回 総合応用問題
- 第 15 回 まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験、確認テスト、レポートにて評価する。

試験	50 点
確認テスト	20 点
レポート	30 点

欠席・遅刻・早退および授業進行の妨げとなる行為は減点とする。

[4] 教 材

e-Learning 教材。

国本温子『ゼロからわかる Visual Basic 超入門』（技術評論社 2009）

[5] 参考図書

「Visual Basic」に関連する書籍など

文書処理演習		担当教員	いの 井 うえ 上 せい 清 いち 一
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

ワープロソフトと表計算ソフトの操作法を習得しながら、企業等でビジネス文書を作成する際に必要な知識と技術を身につけることを目的としている。日商 PC 検定試験（文書作成）3 級・2 級の知識科目と実技科目に対応した演習を中心に行い、就職活動の開始時期までに検定合格に必要な実力を養成することを目的としている。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 ガイダンス
 - 第 2 回 企画書の作成 I、社内文書のフォーマット
 - 第 3 回 企画書の作成 II、社外文書のフォーマット
 - 第 4 回 案内状の作成、時候の挨拶
 - 第 5 回 議事録の作成 I、表作成の練習 1
 - 第 6 回 議事録の作成 II、表作成の練習 2
 - 第 7 回 報告書（調査）の作成、網掛けと文字の折り返し
 - 第 8 回 報告書（営業）の作成、算用数字と漢数字
 - 第 9 回 見積書の作成 I、表の追加と図形変更
 - 第 10 回 見積書の作成 II、図解の練習
 - 第 11 回 稟議書の作成 I、ページ区切りとインデント
 - 第 12 回 稟議書の作成 II、謙譲語と尊敬語
 - 第 13 回 PC 検定模擬試験 I
 - 第 14 回 PC 検定模擬試験 II
 - 第 15 回 手紙の作成、まとめ、授業評価
- なお、毎回授業中に小テストを実施する。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験と課題及び講義中に行う小テストとで評価する。試験 30%、課題 50%、小テスト 20% で評価する。
欠席、遅刻、早退、および授業進行に妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教 材

『日商 PC 検定試験（文書作成）2 級』日本商工会議所編、FOM 出版
必要に応じてプリントを配布する。

[5] 参考図書

- 『日商 PC 検定試験 2 級公式テキスト（文書作成）』日本商工会議所編、FOM 出版
- 『日商 PC 検定試験 2 級知識問題対策問題集（文書作成・データ活用共通）』日本商工会議所編、FOM 出版

[6] その他

日商 PC 検定試験 3 級・2 級はネット会場である本学で受験できる。

日本語表現演習 I		担当教員	さわ ざき とし ふみ 澤 崎 敏 文
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

状況・情報を的確に判断・理解し、自分の考えを論理的に分かりやすく伝える日本語表現の習得を目指す。

演習 I では、主に、「聴く・話す」、「グループワーク」を通して、論理的かつ構造的に自分の考えを伝える能力（クリティカルシンキング）を高める。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 コミュニケーション概論
- 第 2 回 クリティカルシンキングとは（論理的な考え方の基礎）
- 第 3 回 論理的、構造的な文章を考える（文章構造）
- 第 4 回 論理的、構造的な文章を考える（接続表現の重要性）
- 第 5 回 論理的、構造的な文章を考える（接続表現の重要性）、グループ演習
- 第 6 回 論理的、構造的な文章を考える（接続表現の重要性）、グループ演習
- 第 7 回 論理的、構造的な文章を考える（演繹法と帰納法）、グループ演習
- 第 8 回 論理的、構造的な文章を考える（文章のチャート化）
- 第 9 回 自分の考えを正確に伝える（プレゼンテーション演習）
- 第 10 回 自分の考えを正確に伝える（プレゼンテーション演習）
- 第 11 回 多様な意見や情報をまとめる（ブレインストーミング等による演習）
- 第 12 回 多様な意見や情報をまとめる（ブレインストーミング等による演習）
- 第 13 回 多様な意見や情報をまとめる（ワールドカフェによるグループ演習）
- 第 14 回 多様な意見や情報をまとめる（ワールドカフェによるグループ演習）
- 第 15 回 まとめ、最終発表

[3] 評価の方法

発表、レポート、演習による総合評価

発表内容（15 点）、レポートの提出・小テスト等（40 点）、グループ演習の内容（30 点）、授業態度、授業への積極的な参加等（15 点）により評価。出席して演習を行うことに意義があるので、欠席を減点の対象とする。

[4] 教 材

授業中に配布するプリント。

[5] 参考図書

矢野茂樹著「論理トレーニング 101 題」（産業図書）

その他、必要に応じて指示する。

日本語表現演習Ⅱ		担当教員	あまのよしひろ 天野 義 廣
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

本授業は、論理的な思考力と主体的な問題意識を発揮して日本語文章の読み書きに取り組める姿勢の養成を目的とする。そのため毎回の授業では、取り上げる領域に関する知識や考え方を解説した後、次のようなトレーニングを行う。

- ・論理的に記述された文章を読み、その構成・展開・論点等を把握するトレーニング
- ・新聞・書籍などの記事を読み、その内容を要約して表現するトレーニング
- ・一定の課題に対して論理的かつ効果的に自分のメッセージを記述するトレーニング

[2] 授業の計画

- 第 1 回 授業の概要と進め方、クリティカルなリーディング・ライティングとは
- 第 2 回 論説文・説明文・評論文の特色
- 第 3 回 パラグラフ・ライティングの基本
- 第 4 回 文章の構成・展開の型、実際の文章についての分析
- 第 5 回 情報の編集という考え方
- 第 6 回 文章の要約練習その 1
- 第 7 回 文章の要約練習その 2
- 第 8 回 文章の要約練習その 3
- 第 9 回 図書館・インターネット等からの情報探索法及び留意点
- 第 10 回 「一人ブレスト」・「マッピング」等の利用しやすい発想法
- 第 11 回 箇条書き・図表・図解・グラフ等の利用法
- 第 12 回 引用の仕方、表現に関わるマナー
- 第 13 回 レジューメ・パワーポイント画面等の編集上の留意点
- 第 14 回 レポート・論文の書き方その 1
- 第 15 回 レポート・論文の書き方その 2

なお文章の読解・表現に欠かせない漢字・現代社会で多用される重要語句などの知識面についても毎回学習する。

[3] 評価の方法

試験期間中に実施する試験 50%、毎回の課題 50%の割合で評価する。

欠席、遅刻、早退については減点する。

なお授業進行に妨げとなる行為（私語、携帯電話など）についても減点する。

[4] 教 材

藤田哲也編著『大学基礎講座 改増版 充実した大学生活を送るために』（北大路書房 2006 年刊）
他に毎回プリント教材を配付する。

[5] 参考図書

授業中に適宜紹介する。

[6] その他

- ・毎回学習課題を出し提出を求める。それらの課題に真剣に取り組むこと。
- ・授業中は国語辞典（電子辞書可）を持参し、積極的に使用すること。

コミュニケーション演習 I		担当教員	きた おか いち どう 北 岡 一 道
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

英語の E-mail を読む力と、書く力の基礎をつくるのがねらいです。英語の twitter についても読みます。単語や文のかたちになれてください。また、読む力のために、背景的な事情についての知識が必要なことも学びましょう。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 Greetings
- 第 2 回 Invitations
- 第 3 回 Asking your friends
- 第 4 回 Review and exercises
- 第 5 回 Introducing yourself
- 第 6 回 Asking your friend' s favor
- 第 7 回 Announcing an event
- 第 8 回 Comprehension check
- 第 9 回 Inquiry
- 第 10 回 Opening an account
- 第 11 回 Business trip
- 第 12 回 Review and exercises
- 第 13 回 Examples from twittering
- 第 14 回 Twittering overseas
- 第 15 回 Comprehension Check

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は行わない。小・中テスト(40%)、課題(30%)、提出物(30%)により評価する。なお出席状況を重視する。

[4] 教 材
配布物

[5] 参考図書
特になし

プレゼンテーション演習 I		担当教員	しま だ みつ あき 島 田 貢 明
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

プレゼンテーションを行う際にはプレゼンテーションソフトの機能と活用法を理解し、わかりやすい資料を作成することが大切である。この授業では、プレゼンテーションソフト (PowerPoint) の機能を理解し効果的なスライドを作成する考え方や技法について解説する。加えて、作成したスライドをもとにプレゼンテーションを行う際の機器操作についても解説し、「コンピュータをプレゼンテーションの道具として活用する」基礎力を身につけることをねらいとする。

授業内容としては、プレゼンテーションの意義、心構え、進め方などについて解説し、パーソナルコンピュータを用いたプレゼンテーションについて理解を深める。その後 Power Point の様々な機能について演習を通してスライドの作成方を学ぶ。最後に総合課題として作成したスライドをもとに各自発表を行い、相互評価を実施する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 プレゼンテーションとは
- 第 2 回 わかりやすい資料とは
- 第 3 回 Word との連携
- 第 4 回 Power Point とは
- 第 5 回 スライドの作成方法
- 第 6 回 デザインテンプレートの利用
- 第 7 回 イラスト・写真の利用
- 第 8 回 アニメーションの利用
- 第 9 回 SmartArt グラフィックの利用
- 第 10 回 表・グラフの利用
- 第 11 回 リハーサルの実施と時間配分
- 第 12 回 発表時における PC の操作について
- 第 13 回 発表と相互評価(1)
- 第 14 回 発表と相互評価(2)
- 第 15 回 発表のまとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

PowerPoint の実技試験を 40%、発表の結果を 30%、課題等の提出物を 30%として評価する。欠席、遅刻、早退及び授業進行に妨げになる行為 (私語、携帯電話など) は減点する。

[4] 教 材

PowerPoint2007 公認テキスト&問題集 (FOM 出版)
必要に応じてプリントを配布する。

[5] 参考図書

- プロジェクトA&できるシリーズ編集部『できる PowerPoint2007』（インプレス 2007）
浅井宗海『プレゼンテーションと効果的な表現』（SCC 2005）
八幡紕芦史『パーフェクトプレゼンテーション』（生産性出版 2001）
箱田多忠昭『成功するプレゼンテーション』（日本経済新聞社 2001）
海保博之『説明と説得のためのプレゼンテーション』（共立出版 1999）

プレゼンテーション演習Ⅱ		担当教員	しま だ みつ あき 島 田 貢 明
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

プレゼンテーションを実践するためには提起・提案、解釈・学習、報告・評価活動の各段階を理解することが必要である。これらの各段階における情報の視覚化・マルチメディア化の演習を通して「コンピュータをプレゼンテーションの道具として利用する」総合力を身につけることをねらいとする。

授業内容としては、プレゼンテーションにおける話の構成、話し方、質疑応答の手順などについて解説し、パーソナルコンピュータを用いた効果的なプレゼンテーションの技法について理解を深める。最後に総合課題として作成したスライドをもとに各自発表を行い、相互評価を実施する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 効果的な話し方(1)
- 第 2 回 効果的な話し方(2)
- 第 3 回 考えをまとめて発表するには(1)
- 第 4 回 考えをまとめて発表するには(2)
- 第 5 回 効果的なグラフの利用
- 第 6 回 効果的な効果的な図表の利用
- 第 7 回 効果的な写真・動画の利用
- 第 8 回 効果的なアニメーションの利用
- 第 9 回 リハーサルの方法
- 第 10 回 質疑・応答の方法
- 第 11 回 プレゼンテーションの企画と実施
- 第 12 回 発表と相互評価(1)
- 第 13 回 発表と相互評価(2)
- 第 14 回 発表と相互評価(3)
- 第 15 回 発表のまとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

発表の結果を 60%、課題等の提出物を 40%として評価する。

欠席、遅刻、早退及び授業進行に妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教 材

資料としてプリントを配布する

[5] 参考図書

- プロジェクトA&できるシリーズ編集部『できる PowerPoint2007』（インプレス 2007）
- 浅井宗海『プレゼンテーションと効果的な表現』（SCC 2005）
- 八幡純声史『パーフェクトプレゼンテーション』（生産性出版 2001）
- 箱田多忠昭『成功するプレゼンテーション』（日本経済新聞社 2001）
- 海保博之『説明と説得のためのプレゼンテーション』（共立出版 1999）

Web 制作演習 I		担当教員	たなか よういち 田 中 洋 一
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

Web 制作を通して、情報発信の方法、情報倫理、ユーザビリティ（使いやすさ）・アクセシビリティ（使えるかどうか）を学ぶことを目的としています。

大規模サイトを構築する場合を想定し、Web オーサリングソフトを使用して CSS レイアウトを用いた Web 制作を実習します。実際にサーバにて Web を公開し、相互評価、修正を行うことにより、Web の仕組みやプロジェクトの進め方を学ぶ。また、スクリーンリーダー等、障がい者の Web 利用方法を紹介し、アクセシビリティに配慮する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 ガイダンス、ホームページの企画
- 第 2 回 Web オーサリングソフトの基本 1
- 第 3 回 Web オーサリングソフトの基本 2、CSS の設定
- 第 4 回 画像編集、代替テキスト
- 第 5 回 外部 CSS 及びクラスの設定
- 第 6 回 ボーダー、余白、マージン、ID の設定
- 第 7 回 CSS による段組
- 第 8 回 ナビゲーションの CSS 設定
- 第 9 回 リモートサイトの設定
- 第 10 回 表
- 第 11 回 タイトルロゴの作成、背景画像の設定
- 第 12 回 リッチコンテンツの挿入
- 第 13 回 Web の完成
- 第 14 回 相互評価
- 第 15 回 修正、完成

[3] 評価の方法

サイト制作を 50%、課題を 10%、試験期間中の筆記試験を 40%で評価します。

ただし、欠席・遅刻・早退、授業態度により減点する場合があります。

詳細は、第 1 回目のガイダンスで説明します。

[4] 教 材

小泉茜『ゼロからのステップアップ！ Adobe Dreamweaver CS4 with Fireworks CS4 for Windows & Macintosh』（ラトルズ 2009）

[5] 参考図書

『みるみるマスターHTML&スタイルシート 作れる！わたしの Web サイト』（今村勇輔，エクスマレッジ 2009）、その他、市販の HTML、XHTML、CSS、Dreamweaver、Fireworks に関する書籍を参考にしてください。

[6] その他

質問等がある場合は、研究室前に掲示してあるオフィスアワー等を利用するか、電子メールで連絡してください。

Web 制作演習 II		担当教員	よしむらまさてる 吉村正照
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

コンピュータを用いたヴィジュアル／インタラクティブ表現は、様々なソフトウェアの登場で、誰にでも簡単に作成できるようになりました。この授業では、ウェブデザインの基礎を学びながら、ウェブサイトの制作に必要な考え方・作法を身につけてもらうことを目的とします。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 授業の概要、ウェブデザインの基本的なルール
- 第 2 回 ユーザーインターフェースの制作：見出しと本文のデザイン
- 第 3 回 ユーザーインターフェースの制作：ナビゲーション、ボタンのデザイン
- 第 4 回 ユーザーインターフェースの制作：ヘッダとフッタのデザイン
- 第 5 回 ユーザーインターフェースの制作：画像をスライスして複数のパーツを書き出す
- 第 6 回 アニメーション：はじめてのアニメーション
- 第 7 回 アニメーション：トゥイーンアニメ
- 第 8 回 アニメーション：ウェブページにアニメーションを追加する
- 第 9 回 インタラクション：写真をスライドショーで表示する
- 第 10 回 インタラクション：タブで表示を切り替える
- 第 11 回 インタラクション：マウスの動きに反応して表示を切り替える
- 第 12 回 期末課題制作：ビジュアルデザイン案作成
- 第 13 回 期末課題制作：コンテンツの作成
- 第 14 回 期末課題制作：最終チェックとブラッシュアップ
- 第 15 回 プレゼンテーション

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しない。
 期末に制作する作品 50%、各テーマ毎に提出する作品またはレポート 50%
 遅刻や授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教 材

渥美 聡子『Fireworks レッスンブック』（ソシム 2010/09）

[5] 参考図書

SIHO, ビバマンボ 「世界一わかりやすいFlash CS3」（講談社 2008/1）

データベース演習 I		担当教員	ひらつかこういちろう 平塚 紘一郎
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

情報化社会においては大量のデータを効率よく扱うためのデータベースソフトウェアが非常に重要である。データベースを的確に操作することで、業務の効率も飛躍的に向上することが期待できる。Microsoft Access の操作を通じ、データベースおよびデータベースソフトウェアの基礎を学んでもらう。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 授業概要、データベースについて
- 第 2 回 Access 概要
- 第 3 回 テーブル設計とデータ入力
- 第 4 回 リレーションシップ
- 第 5 回 クエリ設計
- 第 6 回 フィールド操作
- 第 7 回 フォーム設計
- 第 8 回 フォーム編集
- 第 9 回 クエリによるレコードの抽出
- 第 10 回 クエリによる集計
- 第 11 回 レポート設計
- 第 12 回 レポート編集
- 第 13 回 宛名ラベル
- 第 14 回 ピボットテーブル・ピボットグラフ
- 第 15 回 まとめ・総合問題

[3] 評価の方法

試験期間中の試験を行う。また、定期的にレポートを課し、提出遅れや未提出の場合は減点とする。欠席・遅刻・早退および授業進行の妨げとなる行為は減点とする。

[4] 教 材

『よくわかる Microsoft Office Access 2010 基礎』(FOM 出版 2010)

[5] 参考図書

Microsoft Access に関連する書籍および問題集など

マルチメディア演習 I		担当教員	よしむらまさてる 吉村正照
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

コンピュータを用いたヴィジュアル表現は、様々なソフトウェアの登場で、誰にでも簡単に作成できるようになりました。この授業では、グラフィックデザインの基礎を学びながら、ビジュアルコンテンツの制作に必要な考え方・作法を身につけてもらうことを目的とします。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 授業の概要、レイアウトと配色、テキストの入力
- 第 2 回 ペンツールを用いたグラフィックの基礎
- 第 3 回 ペンツールを用いたグラフィックの応用
- 第 4 回 デザインのバランス（配色、文字、レイアウト）
- 第 5 回 素材を PC に取り込み加工する（スキャナ、USB メモリ、メールなど）
- 第 6 回 写真画像の編集、加工（縮小、マスク、色補正、書き出し）
- 第 7 回 テクスチャ、パターンを利用する
- 第 8 回 中間課題：地図を作る
- 第 9 回 中間課題のプレゼンテーション／後半の授業の概要
- 第 10 回 ウェブサイトのプロトタイプ制作：ページの内容を作る
- 第 11 回 ウェブサイトのプロトタイプ制作：3 ページのシンプルなサイトを作る
- 第 12 回 期末課題制作：ビジュアルデザイン案作成
- 第 13 回 期末課題制作：コンテンツの作成
- 第 14 回 期末課題制作：最終チェックとブラッシュアップ
- 第 15 回 プレゼンテーション

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しない。

期末に制作する作品 50%、各テーマ毎に提出する作品またはレポート 50%

遅刻や授業態度が良くない場合には減点する。

[4] 教 材

渥美 聡子『Fireworks レッスンブック』（ソシム 2010/09）

[5] 参考図書

阿部 貴弘ほか『Progression による Flash コンテンツ開発ガイドブック』（毎日コミュニケーションズ 2010/4/28）

マルチメディア演習Ⅱ		担当教員	く ぼ たけ のり 久 保 長 徳
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

近年，パーソナルコンピュータの普及やインターネットの普及などによりマルチメディアコンテンツの利用や作成の技術が必要不可欠なものとなっている。本演習では画像，サウンド，動画などのマルチメディアコンテンツの作成を通して，マルチメディア機器や様々なアプリケーションソフトウェアの応用的な利用方法などについて学習する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 概要説明
- 第 2 回 サウンドデータ編集(1)
- 第 3 回 サウンドデータ編集(2)
- 第 4 回 画像編集(1)
- 第 5 回 画像編集(2)
- 第 6 回 ビデオカメラの利用(1)
- 第 7 回 ビデオカメラの利用(2)
- 第 8 回 ビデオカメラの利用(3)
- 第 9 回 ノンリニア編集(1)
- 第 10 回 ノンリニア編集(2)
- 第 11 回 ノンリニア編集(3)
- 第 12 回 作品制作(1)
- 第 13 回 作品制作(2)
- 第 14 回 作品制作(3)
- 第 15 回 作品発表，相互評価

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
 テーマ毎に課す課題の提出内容により評価する(計 100 満点)。
 最後に課題点数に出席率を乗じて成績とする。
 授業態度が著しく良くない場合は減点もしくは欠席扱いとする。

[4] 教 材

e-Learning 教材。
 内容に応じて説明や課題のためのプリントを配布する。

[5] 参考図書

[6] その他

課題は講義内容に連動しているので提出期限を厳守すること。実習課題は時間外にしなければならないことも多いので自分自身で対処する力を身につけてほしい。

生活会計学 I		担当教員	おおにし 大西 しんご 新吾 ・ まつだ 松田 ひらお 平男
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

「生活会計学演習 I」（前期開講科目）では、商業簿記を通して複式簿記の記帳技術を理解し、企業の財政状態と経営成績を明らかにする技法の修得を目的としたが、そこでは簿記会計の入門としての演習が中心であった。ここでは、会計の構造的・理論的側面に注視しながら、会計事象（諸取引）の考察を進めていく。構造的・理論的考察を加味することで、P/L、B/S の作成およびその解釈が可能となることを目指して体系的、具体的に講述する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 会計と会計学
- 第 2 回 複式簿記の原理と構造
- 第 3 回 商品売買取引の会計—売上原価
- 第 4 回 商品売買取引の会計—貸し倒れ
- 第 5 回 有形固定資産の会計—取得と売却
- 第 6 回 有形固定資産の会計—減価償却と減損
- 第 7 回 中間テストと解説
- 第 8 回 会計期間—費用・収益の見越し
- 第 9 回 会計期間—費用・収益の繰延べ
- 第 10 回 純資産の会計—資本金と引出金
- 第 11 回 税金
- 第 12 回 伝票会計
- 第 13 回 決算会計—精算表
- 第 14 回 決算会計—P/L、B/L
- 第 15 回 まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験（70%）、中間テスト（20%）、課題の提出の評価（10%）で評価する。なお、欠席、遅刻、早退および授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教 材

片山覚ほか『入門商業簿記』（創成社）
教材資料プリントを配付する。

[5] 参考図書

中村 忠『現代簿記』（白桃書房）
沼田嘉穂『簿記教科書 [5 訂新版]』（同文館）
武田隆二『簿記一般教程』（中央経済社）他多数

[6] その他

この授業は前期「生活会計学演習 I」と連動しているため、履修希望者は「生活会計学演習 I」を履修しておくこと。

生活会計学演習 I		担当教員	おおにし 大西 しんご 新吾 ・ まつだ 松田 ひらお 平男
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

簿記会計の基礎的学習を主眼とする。簿記会計はビジネスにおけるひとつの重要な「言語」である。企業はこの「言語」を使って自身の経済活動を財務諸表というかたちで表現することで、企業を取り巻くさまざまな関係者とコミュニケーションをとっている。ここでは講義用教科書とは別に「簿記ワークブック」を必携に、商業簿記の基本原理の理解と技能の習得を図る。なお、この授業は後期「生活会計学 I」につながっており、両科目を履修することにより、日商・全経簿記検定 3 級の資格取得を目指すことが可能となる。前期のこの授業は、入門編として専ら演練に時間を割くことになる。

[2] 授業の計画

- 第 1 回～第 2 回 資産・負債・純資産と貸借対照表の作成
- 第 3 回～第 4 回 収益・費用と損益計算書の作成
- 第 5 回～第 6 回 取引・仕訳・転記と勘定記入(伝票・仕訳帳・総勘定元帳・証憑)
- 第 7 回 小テスト 1 と解説・確認
- 第 8 回～第 10 回 試算表の作成、決算および六桁精算表の作成
- 第 11 回～第 13 回 仕訳帳・元帳の締切りと財務諸表の作成
- 第 14 回 小テスト 2 と解説・確認
- 第 15 回～第 17 回 現金出納帳・当座預金出納帳・小口現金出納帳の記帳
- 第 18 回～第 20 回 商品売買の処理と仕入帳・売上帳および商品有高帳の記帳
- 第 21 回 小テスト 3 と解説・確認
- 第 22 回～第 24 回 売掛金・買掛金ならびに得意先元帳・仕入先元帳の記帳
- 第 25 回～第 26 回 掛売買以外の債権・債務の処理
- 第 27 回～第 29 回 手形 (1)授受と決済 (2)裏書と割引 (3)手形記入帳 (4)手形貸借の処理
- 第 30 回 まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験(75%)、小テスト(15%)、ワークブック等の提出(10%)で評価する。なお、欠席、遅刻、早退および授業進行の妨げになる行為(私語、携帯電話など)は減点する。

[4] 教 材

- ・片山覚ほか『入門商業簿記』(創成社)
- ・加古宜士他『新検定簿記ワークブック 3 級商業簿記』(中央経済社)
- ・授業中に配布するプリント

[5] 参考図書

「生活会計学 I」の同項欄の記載図書に同じ。

[6] その他

この授業は、後期の「生活会計学 I」と連動している。「生活会計学 I」の履修希望者は、この授業を履修すること。

生活管理		担当教員	おか だ みず ほ 岡 田 瑞 穂
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

私たちは社会の中で多くの人と関わりあって生活している。人はおたがいに思いやり、社会生活のルールを守り、先人から伝えられた文化を受け継いで、心豊かに過ごしたいと思う。しかし、社会の変化、生活様式の変容、家庭生活の変化などに応じて、よりよい方法を探り、確立していくことも必要である。人と気持ちよく過ごすためのマナー、毎日の生活の中におけるマナーは、相手への思いやりとともに自分も快く過ごせるためのものである。生活の中で伝承されることが少なくなった文化、忘れられたマナーなど基本的なことを演習、実習形式で学習する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 マナー（しつけ）教育の必要性について (1) 日常の美しい動作と態度
(2) 自己紹介(実習) ◎ビデオ「日常のマナー」
- 第 2 回 面接の心得とマナー (1) 面接までのマナー (2) 面接本番の流れとマナー
(3) 自己 PR (実習)
- 第 3 回 言葉づかいのマナー (1) 日常の言葉づかい (2) 敬語の使い方
◎ビデオ「言葉づかいのマナー」
- 第 4 回 訪問と応対 (1) 訪問するときのマナー (2) 来客への応対マナー
- 第 5 回 " (3) もてなしのマナー (4) お茶の入れ方、出し方実習
- 第 6 回 電話のマナー (1) 電話のかけ方 (2) 電話の受け方 ◎ビデオ「電話のマナー」
- 第 7 回 手紙、ハガキのマナー (1) ハガキのマナー (2) 外国へのハガキのマナー
- 第 8 回 " (3) 手紙のマナー (4) ハガキ、手紙の実習
◎ビデオ「手紙の書き方」
- 第 9 回 食事のマナー (1) 西洋料理の基本とマナー (2) 日本料理の基本とマナー
- 第 10 回 " (3) 中国料理の基本とマナー (4) パーティでのマナー
◎ビデオ「楽しい食事のマナー」
- 第 11 回 旅行でのマナー (1) ホテル、旅館でのマナー (2) 乗り物でのマナー
(3) 海外旅行でのマナー ◎ビデオ「身だしなみの基本」
- 第 12 回 慶事のマナー (1) 披露宴に招待されたときの心得 (2) 人生の祝い事
- 第 13 回 弔事のマナー (1) 通夜、葬儀、告別式の心得 (2) 近隣とのつきあい
(3) 金包みと表書きの心得 (4) ビデオ「慶弔のマナー」
- 第 14 回 茶席でのマナー (1) 茶席での客の心得 (和室にて実習)
- 第 15 回 和室において、今までの実習について総まとめ、実技テスト、レポート提出

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。課題レポート 50 点 (25 点×2 回)、実習 50 点 (25 点×2 回)、欠席や授業の妨げになる行為は減点して総合評価する。

[4] 教 材

テキストは使用せず、適宜プリントを配布、VHS を用いる。

[5] 参考図書

石川信子他『新しいビジネスマナーの本』(ビジネス社 2007)
浦野啓子『ビジネスマナーの基本』(新星出版社 2007)

日本の文化		担当教員	おか 岡	だ 田	みず 瑞	ほ 穂	他
授業の種類	単位数	配当学年・時期		必修・選択			
講義	2単位	1・2年次通年		選択			

[1] 授業のねらい

日本の伝統文化（茶道、華道、装道）の歴史や理論を学ぶとともに、それぞれ実技を行うことにより、女性としての所作、言葉遣い、マナーを学ぶ。

伝統的な技・精神・礼節を身につけることで、生活をより豊かにするばかりでなく、日本の美に対する感性を磨く。そして、感性豊かな人格を形成し、他者をもてなす心、やすらぎのある人間関係を構築することを目的とする。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 講義の概要と授業計画について
- 第 2 回 実社会における茶道の役割について
- 第 3 回 茶道の歴史・和室でのマナー
- 第 4 回 茶会に招かれた時のマナー
- 第 5 回 茶道の精神「和敬清寂」について
- 第 6 回 華道から学ぶマナーの精神
- 第 7 回 華道の歴史・基本的な花の生け方とマナー（Ⅰ）
- 第 8 回 基本的な生け方とマナー（Ⅱ）
- 第 9 回 茶道・華道における基本的なマナーについての課題を行い評価する
- 第 10～11 回 着付けを通して、和服の名称、扱い方、たたみ方、手入れ法等を学ぶ
着付けに際しての補正の仕方、浴衣の着方実習
- 第 12～13 回 浴衣を着て、半幅帯の結び方実習。和服着用時のマナー（立ち方、歩き方、階段の昇降、車の乗降、座る、食事）等について実習
- 第 14～15 回 浴衣を着て、帯結びをし、立つ、歩く、座礼、浴衣をたたむ等のマナーによる課題を行い評価する

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。茶道、華道、着付けの評価とレポートを総合して評価する。ただし、欠席、授業を妨げる行為は減点する場合がある。

[4] 教 材

テキストは使用しない。

[5] 参考図書

- ・千宗室『裏千家茶道教科（1）～（4）』（淡交社刊行 2010）
 - ・笹島寿美『はじめての着付けと帯結び』（株式会社ナツメ社 2007）
 - ・池坊専永『なぜ、花をいけるの』（財団法人池坊華道会 2010）
- その他必要に応じて指示する

演習 I A		担当教員	ひら 平	つか 塚	こういちろう 紘一郎
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択		
演習	1 単位	1 年次通年	選択		

[1] 授業のねらい

企業には、情報技術に関する知識だけではなく、企業活動、経営戦略、システム開発などの幅広い知識を持つ人材が求められている。これらの幅広い知識により広い視野を持つことができ、効率的に業務をこなすことができる。この講義では、情報処理技術者試験の IT パスポート試験取得を目指す。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 講義概要と資格試験概要
- 第 2 回 企業活動の基本
- 第 3 回 企業活動における法律
- 第 4 回 経営戦略
- 第 5 回 企業や会社で利用されているシステム
- 第 6 回 システム開発
- 第 7 回 システム監査
- 第 8 回 コンピュータの基礎知識
- 第 9 回 コンピュータシステム
- 第 10 回 表計算ソフトとデータベース
- 第 11 回 コンピュータネットワークの基礎
- 第 12 回 セキュリティ対策とリスク管理
- 第 13 回 資格試験対策 1(過去問題 1)
- 第 14 回 資格試験対策 2(過去問題 2)
- 第 15 回 資格試験対策 3(過去問題 3)、資格試験の心構え

[3] 評価の方法

IT パスポート試験の結果にて評価する。

[4] 教 材

e-Learning 教材。

岡嶋 裕史『平成 23 年度 [春期][秋期] IT パスポート試験合格教本』(技術評論社 2010)

[5] 参考図書

「IT パスポート試験」に関連する書籍および問題集など

演習 I B		担当教員	おおにし 大西 しんご 新吾
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

この授業は、「生活会計学 I」、「生活会計学演習 I」で学習した簿記会計の基礎知識を土台にして、日商簿記検定試験 3 級に合格する力をつけることをねらいとする。ここでは、検定試験範囲の総括的な復習をした後、検定試験の過去問題を中心に演練する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 取引と仕訳 一期中取引の確認
- 第 2 回 取引と仕訳 一決算取引の確認
- 第 3 回 テスト 1 と解説・確認
- 第 4 回 補助簿等の確認 一仕入帳・売上帳、商品有高帳、手形記入帳など
- 第 5 回 試算表作成問題
- 第 6 回 テスト 2 と解説・確認
- 第 7 回 精算表作成問題
- 第 8 回 貸借対照表と損益計算書作成問題
- 第 9 回 テスト 3 と解説・確認
- 第 10 回 検定過去問題演練
- 第 11 回 テスト 4 と解説・確認
- 第 12 回 検定過去問題演練
- 第 13 回 テスト 5 と解説・確認
- 第 14 回 検定過去問題演練
- 第 15 回 テスト 6 と解説・確認

[3] 評価の方法

テスト 1～3 (15%)、テスト 4 (15%)、テスト 5 (30%)、テスト 6 (40%) で評価する。なお、欠席、遅刻、早退および授業進行の妨げになる行為 (私語、携帯電話など) は減点する。

[4] 教 材

『日商簿記検定試験模擬問題集 3 級商業簿記』(ネットスクール) および授業中に配布するプリント

[5] 参考図書

日商簿記検定試験 3 級に関する問題集等は多数出版されているので、各自参照することが望ましい。

生活科学論		担当教員	ふじ 藤	わら 原	まさ 正	とし 敏
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択			
講義	2 単位	1 年次後期	必修			

[1] 授業のねらい

情報通信技術（IT）の進展により、情報が時間、空間を超えて、瞬時に伝わる社会が実現した。そのため、私たちの生活においても、働き方、学び方、ショッピングの仕方、医療の仕組み、行政の機能などが変わりつつある。一方、格差社会、少子高齢化社会の到来、地縁血縁などのコミュニティの崩壊が進んでいると言われている。私たちの生活をITの活用により、安心安全で、活力ある社会にしていかなければならない。本科目では、情報を科学的に捉えて、ITの利便性と欠点に理解を深めて、私たちの日常生活のあり方、社会との関わり方、情報システムのあり方について考察する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 生活科学論について
- 第 2 回 高度情報化社会における生活科学
- 第 3 回 日常生活と情報の関わり- 1 情報の収集・整理
- 第 4 回 日常生活と情報の関わり- 2 情報の加工・表現・発信・交換
- 第 5 回 日常生活と情報の関わり- 3 衣食住における情報の役割
- 第 6 回 日常生活と情報の関わり- 4 生活環境と情報
- 第 7 回 日常生活と情報の関わり- 5 デザインと情報
- 第 8 回 中間まとめ
- 第 9 回 人間と情報通信技術の情報処理のちがひ
- 第 10 回 情報伝達の多様化と生活の変化
- 第 11 回 情報社会の進展と日常生活
- 第 12 回 情報社会のもたらす影響と課題
- 第 13 回 情報社会における個人の役割と責任
- 第 14 回 情報社会の進展と光と影
- 第 15 回 総まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施する。
小テスト 60%（2 回）と演習課題 40%（4 回を予定）、講義ノートで総合評価をする。

[4] 教 材

藤原正敏他『ネットワーク社会における情報の活用と技術』三訂版（実教出版）
藤原正敏他『ネットワーク社会における情報の活用と技術』三訂版 学習ノート（実教出版）

[5] 参考図書

Web教材、配布プリント

衣生活論		担当教員	おか だ みず ほ 岡 田 瑞 穂
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次前期	必修

[1] 授業のねらい

現代科学の先端技術を駆使した新素材の開発や、既製服の多様化、個性化により、わたしたちの衣生活は大きく変化するとともに大変豊かになった。こうした時代にあってわたしたち消費者は、各自が衣服を選択、購入し美しく健康に着用管理するなど、日常的な衣生活活動を地球的な視野から健全に営むことのできる、自立した賢い生活者となり、また、これまでの衣生活文化を理解し、伝統と変革のバランスを考えながら、国際化が一層進むであろうこれからの衣生活の充実、向上を図ることをねらいとしている。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 衣服と心理 1. 現代生活と衣服 (1) 個人、社会生活と衣服
- 第 2 回 2. 衣文化の変容 (1) 衣服形態、色彩の意味と象徴性 (2) 服飾の変遷
◎ビデオ「服装のルーツ」
- 第 3 回 3. 服飾表現のメッセージ (1) 現代服飾の動向 (2) 色彩による感情効果
◎ビデオ「服装のルネッサンス」
- 第 4 回 衣服の造形と着装 1. 被服の機能 2. 人体の形態と衣服の造形
- 第 5 回 3. 被服の構成 (1) 平面構成 (2) 立体構成 (3) 被服造形の基本的な方法
- 第 6 回 4. 着衣の衛生と生活活動 (1) 温熱の調節 (2) 身体の拘束性
- 第 7 回 5. これからの着装行動 (1) 衣生活の成り立ち (2) これからの衣生活
(3) 高齢化時代と着装 (4) 環境と着装行動
◎ビデオ「和服の歴史」
- 第 8 回 衣服の素材 1. 繊維素材 (1) 繊維の種類、性能、用途
2. 構造物としての糸や布 (1) 糸 (2) 織物と編物
- 第 9 回 3. 素材の染色と加工 (1) 素材の染色と加工 (2) 仕上げ加工と素材
- 第 10 回 衣服の衛生、管理と環境 1. 人体の衛生、保護と衣服 (1) 人体の汚れと保護
- 第 11 回 2. 衣服の管理 (1) 洗濯 (2) しみ抜き、漂白 (3) 仕上げ、保管
◎ビデオ「被服の管理」
- 第 12 回 衣服と消費者の自立 1. 衣服の選択、購入と情報の活用
- 第 13 回 2. 「衣」の消費者問題と対応 (1) 衣をめぐる消費者問題
- 第 14 回 3. 衣服の生産、消費と廃棄の問題 (1) ワードローププランと廃棄
- 第 15 回 衣生活における諸課題についてレポート提出

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。試験 80 点、授業中の課題 20 点 (10 点×2 回)、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

内藤道子他『衣生活論』(建帛社 2008)

[5] 参考図書

島崎恒蔵・佐々井啓『衣服学』(朝倉書院 2009)、佐々井啓『衣生活学』(朝倉書院 2007)
田村照子『衣環境の科学』(建帛社 2007)

食生活論		担当教員	きし まつ しず よ 岸 松 静 代
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

最近の科学技術や情報技術の飛躍的な発展は、産業構造や家族形態に大きな変化を与え、私たちの食生活にも大きな影響を及ぼしている。こうした食生活の現実をいろいろな面から捉え考えてみたい。「人間にとって『食べる』とはどのようなことか」をふまえておくことは、今後学習する専門分野の関連性や重要性を理解する一助となるであろう。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 食生活の概念
- 第 2 回 食生活の歴史
- 第 3 回 食生活の現状（日本型食生活）
- 第 4 回 食生活の現状（食材の安心・安全）
- 第 5 回 食生活の現状（健康の問題）
- 第 6 回 食品の生理的機能
- 第 7 回 食生活の精神的機能
- 第 8 回 食生活の社会的機能
- 第 9 回 食生活の文化的機能
- 第 10 回 おいしさとは？
- 第 11 回 日本と世界の食糧事情
- 第 12 回 妊娠期～学童期の食生活
- 第 13 回 思春期～中年期の食生活
- 第 14 回 老年期の食生活
- 第 15 回 これからの食生活

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。
欠席、遅刻, 早退は減点の対象とする。

[4] 教 材

福田靖子・小川宣子編『食生活論（第3版）』（朝倉書店 2009）

[5] 参考図書

池本真二・稲山貴代編『食事と健康の科学（第2版）』（建帛社 2008）

保育学		担当教員	かい どう よう こ 海 道 洋 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

この保育学は家庭科の教員や保育士といった専門家養成のための講義ではなく、ごく一般の学生を対象にして、子どもが育つこと、子どもを育てることに思いをはせ、自分自身が育ってきた過程や子ども時代を振り返り、人が人として育つことの意義や子どもの成長の奥深さを感じ、当然もっていて欲しい常識のレベルでの「教養としての保育学」にしたい。

少子高齢社会といわれる現代では、昔のように子どもの育っていく姿を家庭の中で見る事はほとんど不可能である。弟妹・甥姪の世話を手伝いながら、自然に子育てを学ぶ機会はまずなくなったと言って良いだろう。したがって次代を担う子ども達の保育（乳幼児がより良い方向に育てられるように援助すること）を授業の中で学ぶ事は意義のあることと思う。

学生が自分の問題として、保育（子育て）に興味を持てるように進めていく。内容としては発達特徴と子どもの気持ちに寄り添った具体的ななかかわりを学んでいく。子どもの遊びや年齢に適した絵本を紹介したり、教科書やVTRを用いたりして授業を展開する。楽しく、しかし真剣に学んでもらいたい。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 保育学とは何か（オリエンテーションを兼ねて）
- 第 2 回 保育の歴史と現状
- 第 3 回 子どもの心身の発達と遊び ①（出生～6 か月）
- 第 4 回 " ②（6 か月～1 歳 3 カ月）
- 第 5 回 " ③（1 歳 3 カ月～2 歳）
- 第 6 回 " ④（2 歳）
- 第 7 回 " ⑤（3 歳）
- 第 8 回 " ⑥（4 歳）
- 第 9 回 " ⑦（5 歳）
- 第 10 回 " ⑧（6 歳）
- 第 11 回 家庭、小学校、地域社会との連携
- 第 12 回 少子高齢社会における子育て①（子育て支援制度）
- 第 13 回 " ②（子育て支援の実情）
- 第 14 回 子どもを取り巻く環境を考える①（児童虐待）
- 第 15 回 " ②（児童虐待の実情）

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。

試験 100 点

欠席、遅刻・早退については減点する。

その他 授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）についても減点する。

[4] 教 材

改訂・保育士養成講座編纂委員会/編 『保育原理』（全国社会福祉協議会 2010・4 月）

人間関係論		担当教員	しみず 清水	さとし 聡
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択	
講義	2 単位	1 年次後期	選択	

[1] 授業のねらい

複数の人間が近くに存在する、あるいは一緒に活動している社会的場面において、人間がどのように考え、行動するのかについて学ぶ。授業では、社会的場面における個人の心理的過程、対人行動、集団と個人の関係、人間関係の形成などに関する代表的なトピックスを取り上げて概説する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 集団と個人 1
- 第 2 回 集団と個人 2
- 第 3 回 集団と個人 3
- 第 4 回 態度と態度変容
- 第 5 回 社会的影響
- 第 6 回 リーダーとリーダーシップ 1
- 第 7 回 リーダーとリーダーシップ 2
- 第 8 回 社会的認知 1
- 第 9 回 社会的認知 2
- 第 10 回 自己 1
- 第 11 回 自己 2
- 第 12 回 魅力と対人関係 1
- 第 13 回 魅力と対人関係 2
- 第 14 回 援助と攻撃 1
- 第 15 回 援助と攻撃 2

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施せず、レポート及び小テストにより評価する。

レポート 30 点、講義中程に課す。内容は講義中に指示する。

小テスト 70 点、毎回の講義の冒頭に行く。各 5 点ずつ。(第 1 回目は実施しない)

[4] 教 材

テキストは使用しない。適宜プリントを配布する。

[5] 参考図書

講義中に指示する。

食品学総論		担当教員	かとうたかお 加藤隆夫
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	1年次前期	必修

[1] 授業のねらい

生物は、何らかの手段で生体維持に必要な栄養素を得て成長し、次世代を残していく。哺乳動物のうちでも際立って生存期間の長い人間もその例外ではなく、各種の食品から種々の栄養素を得て生存し、繁殖し続けてきた。しかし、かつては生きるために食べ物を得ることがきわめて困難な時代を長く経験してきた。現代に至り、ようやくバラエティーに富んだ食品が、自由に手にはいるような時代となった。特に日本を含めた先進諸国では飽食の時代といわれている。しかし、発展の遅れた国や環境の悪い国では、現在でも飢えて死ぬ人が多くいる。私たちは、このような世界の状況を十分認識し、より良い食生活を営んでいく必要がある。そのためには、正しい知識が不可欠となる。そこで、現代における『食品』のあるべき姿を考えてみたい。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 食の歴史的変遷、食生活と健康、食と環境問題
- 第 2 回 食品の分類、食品成分表
- 第 3 回 食品の一次機能：水分、炭水化物
- 第 4 回 脂質
- 第 5 回 たんぱく質
- 第 6 回 無機質（ミネラル）
- 第 7 回 ビタミン
- 第 8 回 食品の二次機能：色素成分、香り成分
- 第 9 回 味成分
- 第 10 回 食品の三次機能
- 第 11 回 食品中の有害成分
- 第 12 回 食品の成分変化
- 第 13 回 "
- 第 14 回 食品の物性
- 第 15 回 "

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。
 試験：記述式、持ち込み不可（試験 100 点、欠席、遅刻などは減点する）
 ※授業開始後、5 分以上の遅刻は欠席とする。

[4] 教 材

青木正編著・加藤隆夫他『新食品学総論・各論』（朝倉書店）

食品学各論		担当教員	かとうたかお 加藤隆夫
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	1年次後期	選択

[1] 授業のねらい

栄養士はその職務から考え、食品学について学び知るべきことは、食品を利用する立場から、食品がどのような性状、機能をもっているかをよく把握、理解し関連する教科目と共に得た知識を総合して人間の健康増進、疾病の予防、治療に応用することにある。また、個々の食品について学んだ知識を生かし、市場に供給・消費される食品はこうあるべきものとして、生産の場にフィードバックすることも望まれる。

このような観点から考えその内容については、各食品群の栄養、嗜好、機能など、その特性に力点を置き、また必要な範囲内でその食品を知るために重要な生物学的、農畜水産学的な知識について学ぶことを授業のねらいとした。さらに将来受験するであろう管理栄養士国家試験にも役立つよう指導する。

[2] 授業の計画

内容構成は各種食品の価値、成分上の特徴および食品の取扱い（流通、貯蔵、加工、調理）の過程で生ずる変化について述べる。なお各食品群に微生物利用食品も入れる。

- 第 1 回 穀類・・・生産と消費、米、小麦、大麦、トウモロコシ、ソバ、その他雑穀類
- 第 2 回 イモ類・・・サツマイモ、ジャガイモ、朴葉、ヤマノイモ、コンニャクイモ、その他のイモ類
- 第 3 回 マメ類・・・ダイズ、アズキ、インゲンマメ、エンドウ、ソラマメ、ラッカセイ、その他のマメ類
- 第 4 回 マメ類の微生物利用食品・・・ミソ、ショユ、ナットウ、その他
- 第 5 回 種実類について
- 第 6 回 野菜類・・・野菜類の生産と消費、野菜類の種類、成分
- 第 7 回 各種野菜類の性状と化学成分、加工
果実類・・・生産と消費、果実類の種類、性状と化学成分、加工品
- 第 8 回 キノコ類・・・生産と消費、種類と性状、成分、加工品
海藻類・・・生産と消費、成分、加工品
- 第 9 回 植物性食品の輸入の現状と安全性
- 第 10 回 食肉類・・・食肉の生産と消費および種類、食肉の性状、筋肉組織、屠殺後の変化、食肉類の化学成分、食肉類の加工品と化学成分
- 第 11 回 乳類・・・牛乳の性状・成分、牛乳の利用、その他の乳類
- 第 12 回 卵類・・・鶏種と卵の流通、卵の生物的特性と一般成分の特徴、卵の利用と加工
- 第 13 回 魚介類・・・魚肉の組織、成分、特殊成分、魚介類の鮮度について、死後変化及び貯蔵中の変化、各種魚介類、魚介類の加工品
- 第 14 回 甘味料、うま味料、酸味料、食塩、香辛料について
- 第 15 回 嗜好飲料・・・茶、コーヒー、清涼飲料
アルコール飲料・・・アルコールについて（代謝・生理なども含む）

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。

試験：記述式、持ち込み不可（試験 100 点、欠席、遅刻などは減点する）

※授業開始後、5 分以上の遅刻は欠席とする。

[4] 教 材

菅原龍幸・加藤隆夫他『改訂食品学Ⅱ』（建帛社 2008.9）

食品化学実験 I		担当教員	なる 鳴瀬みどり
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実験	1 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

学生の多くは、入学以前に自分自身で化学実験を行った経験が乏しく、また、化学の知識もきわめて断片的であり、実験に恐怖心を抱いている者も少なくない。こうした実状をふまえて、1) 化学実験とはいかなるものか、実験を正しく安全に行うにはどうしたらよいか、心構え、基本操作などを学ぶとともに、2) 実験導入への第一歩として、容量分析等のごく基本的な実験を行う。「食品化学実験 I」では化学分析のうち、容量分析の基本的操作(下記題目)に取り組み、その技術が身に付くまで反復練習すると共に、容量分析などの化学計算法を理解することをねらいとしている。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 実験の心得、薬品の取扱上の注意
- 第 2 回 実験のための基礎知識① (物質量)
- 第 3 回 " ② (物質の濃度と単位)
- 第 4 回 " ③ (データ整理の方法)
- 第 5 回 中和滴定法 (塩酸標準液の作成と標定)
- 第 6 回 中和滴定法 (水酸化ナトリウム標準液の標定)
- 第 7 回 中和滴定法 (食酢中の酢酸の定量)
- 第 8 回 沈澱滴定法 (硝酸銀標準溶液の調製と標定)
- 第 9 回 沈澱滴定法 (みそ汁の食塩の定量)
- 第 10 回 沈澱滴定法 (まとめと考察)
- 第 11 回 キレート滴定法
(エチレンジアミン四酢酸ニナトリウムー標準溶液の作成と標定ー)
- 第 12 回 キレート滴定法 (水道水の硬度測定)
- 第 13 回 キレート滴定法 (飲料水の Ca イオンの測定)
- 第 14 回 未知試料試験①
- 第 15 回 未知試料試験② (結果発表)

[3] 評価の方法

実験レポート 30%、未知試料試験 20%、試験期間中の試験 50%とする。
その他、欠席、遅刻・早退及び授業進行に妨げになる行為を減点とし総合評価する。

[4] 教 材

中村カホル他編著『新基礎食品学実験書』(三共出版)
※本教材は食品化学実験Ⅱでも継続して使用する。
必要に応じ資料としてプリントを配付する。

[5] 参考図書

河合 聡『定量分析化学』(丸善 1992)
『五訂増補 日本食品成分表』

[6] その他

実験にあたり、白衣・上履を必ず着用する。
指示がある場合は電卓を持参すること。

食品化学実験Ⅱ		担当教員	たね むら やす こ 種 村 安 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実験	1 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

食品化学実験Ⅱでは、食品中の水分、脂質、タンパク質、灰分、ビタミンの定量を行う。実験を通して、「日本食品標準成分表」の食品分析法を理解するとともに、講義で学んだ栄養素の性質や特徴について理解を深める。正しい実験結果が得られるよう、数値の取り扱いや基本的な実験操作を習得する。実験ノートを活用して他人に分かるレポートを作成する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 ガイダンス・受器の恒量
- 第 2 回 脂質の定量（ソックスレー抽出法） (1) 抽出
- 第 3 回 " (2) 測定
- 第 4 回 " (3) まとめ
- 第 5 回 タンパク質の定量(ケルダール法) (1) 分解
- 第 6 回 " (2) 窒素の定量
- 第 7 回 " (3) 蒸留・滴定
- 第 8 回 " (4) まとめ
- 第 9 回 水分の定量（常圧加熱乾燥法）
- 第 10 回 灰分の定量(直接灰化法)
- 第 11 回 ミネラル測定用試料液の作成
- 第 12 回 リンの定量(モリブデン青比色法)
- 第 13 回 鉄の定量（フェナントロリン比色法）
- 第 14 回 ビタミンCの定量(インドフェノール法) (1) アスコルビン酸標準液の検定
- 第 15 回 " (2) 本試験

[3] 評価の方法

試験期間中の試験(50%)、実験レポート(50%)
欠席、遅刻、早退及び授業進行に妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教 材

滝田聖親他共著『新基礎食品学実験書』（三共出版）
* 食品化学実験Ⅰから引き続き使用する。

[5] 参考図書

『五訂増補 日本食品標準成分表』

[6] その他

実験中は白衣・上履きを必ず着用する。電卓を持参すること。

食品加工学		担当教員	み たに かつ み 三 谷 勝 己
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

食品の加工技術が進歩するとともに各種の加工食品が製造され、その原材料、製造方法、保存方法などに関する情報はますます複雑、多様化してきている。又、我々の食生活における加工食品の依存度が高まるにつれて、この食品の問題点も明らかにされてきている。食品の生産から消費までを含めて食品加工の健全性が求められてきているのも事実である。

こうしたなかで、私達はこれらの食品を正しく選択することが求められ、そのためには食品の加工、保存などの基本概念を十分理解してさらに個々の食品の知識を深める必要がある。

これらのことから、ここでは新しい加工技術なども含めて食品加工学を学習する。

[2] 授業の計画

第 1 回 食品加工の目的と社会背景

第 2 回 食品加工法の分類 (1) 物理的作用による方法 (2) 化学的作用による方法
(3) 生物的作用による方法

第 3 回 食品の保存 (1) 食品の品質劣化とその要因 微生物の種類、生育因子など

第 4 回 食品の保存 (2) 食品の品質劣化とその要因 酵素、水分、pH など

第 5 回 食品の保存法と保存食品 水分活性低下、低温、密封加熱
ガス調節による方法など

第 6 回 食品の保存法と保存食品 放射線、食品添加物による方法など

第 7 回 食品の包装、加工食品の規格と表示制度

第 8 回 調理加工食品 (1) 冷凍食品 (2) 缶、びん詰食品など

第 9 回 農産加工品 (1) 穀類の加工品 (2) 豆類の加工品など

第 10 回 畜産加工品 (1) 肉類の加工品 (2) 卵類の加工品など

第 11 回 水産加工品 (1) 魚介類の加工品 (2) 海藻類の加工品など

第 12 回 調味料及び食用油脂

第 13 回 嗜好性食品

第 14 回 新類型加工食品

第 15 回 新しい食品加工技術

[3] 評価の方法

ミニテスト 20 点、レポート点 20 点、試験期間中の試験 60 点の 100 点満点で評価する。授業に取り組む姿勢や授業進行を妨げる行為（私語、携帯電話など）も採点の対象とする。

[4] 教 材

必要に応じてプリントを配付する。

[5] 参考図書

國崎・川澄編『新食品・加工概論』（同文書院 2001）

森孝夫編『食品加工学』（化学同人 1999）

吉田勉編『新食品加工学』（医歯薬出版 1999）

栄養学総論		担当教員	たね むら やす こ 種 村 安 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次前期	必修

[1] 授業のねらい

栄養学は、食品学や生化学などで学んだ食品成分や栄養素、各栄養素の体内代謝に関する知識を基に、生体の側からどのような食事や生活をしたら健康の維持増進に役立つか、その実践的方法を追及する学問として発展してきた。したがって、栄養学総論では、栄養素の栄養的意義や利用の仕方、栄養素の体内での相互作用や関連性、生体全体としての調節システムを理解することに重点を置く。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 栄養の概念：栄養の定義、栄養素の種類と機能、人体成分と食事成分
- 第 2 回 栄養と健康・疾患：欠乏症、過剰症、生活習慣病
- 第 3 回 栄養学の歴史、食事摂取基準
- 第 4 回 三大栄養素の化学 (1)炭水化物
- 第 5 回 " (2)脂質
- 第 6 回 " (3)たんぱく質・アミノ酸
- 第 7 回 摂食行動 (1)食欲と空腹、(2)摂食の調節
- 第 8 回 消化・吸収と排泄 (1)消化のしくみ、(2)吸収のしくみ、(3)排便の機序
- 第 9 回 栄養素の働き (1)エネルギーの産生 (糖質、脂質)
- 第 10 回 " (2)体の構成成分(たんぱく質・アミノ酸、たんぱく質の栄養価)
- 第 11 回 " (3) " (脂質、ミネラル)
- 第 12 回 " (3)代謝の調節 (ビタミン、ミネラル)
- 第 13 回 " (4)生体調節機能 (食物繊維)
- 第 14 回 エネルギー代謝 (1) エネルギーの定義、単位、基礎代謝、安静時代謝
- 第 15 回 " (2) エネルギー消費量の測定法

[3] 評価の方法

試験期間中の試験 (70%)、小テスト (30%)
欠席、遅刻、早退及び授業進行に妨げになる行為 (私語、携帯電話など) は減点する。

[4] 教 材

谷 政八編『最新「栄養学」』(中央法規)

[5] 参考図書

- 吉田勉・石井孝彦・篠田粧子『新基礎栄養学』(医歯薬出)
- 小林修平・山本 茂編『人体栄養学の基礎』(建帛社 2007)
- 厚生労働省策定『日本人の食事摂取基準 (2010 年版)』(第一出版)

栄養学各論		担当教員	いけ 池 だ 田 りょう 涼 こ 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	1年次後期	選択

[1] 授業のねらい

ヒトの生活様式は様々であり年齢、性別、職業、運動習慣、飲酒、喫煙等の個人の生活習慣の幅に伴い、栄養素の必要量が異なる。また、個人の成長、発達、加齢といった生理的变化に応じて適切な栄養ケアも変化してゆく。

本講義は実践的な栄養学の基礎として食事摂取基準の適用が可能なヒトを対象に、ライフステージ別の生理学的特徴と栄養ケア・栄養マネジメントのあり方について学んでいく。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 ライフサイクルと栄養マネジメント
- 第 2 回 食事摂取基準の科学的根拠
- 第 3 回 妊娠期の栄養
- 第 4 回 授乳期の栄養
- 第 5 回 乳幼児期の栄養
- 第 6 回 離乳と食物アレルギー
- 第 7 回 学童期の栄養
- 第 8 回 思春期の栄養
- 第 9 回 成人期の栄養
- 第 10 回 更年期の栄養
- 第 11 回 骨代謝と骨粗鬆症
- 第 12 回 高齢期の栄養
- 第 13 回 生活習慣病と栄養素
- 第 14 回 運動、スポーツと栄養
- 第 15 回 環境と栄養

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。

試験 70%、レポート 30%の合計で評価する。その他、欠席、遅刻・早退を上記の合計点より減点し、総合評価する。

[4] 教 材

鈴木和春編著『応用栄養学』（光生館）

その他必要に応じてプリント・視聴覚媒体を使用する。

[5] 参考図書

『ヒューマンニュートリション』（医歯薬出版）

『日本人の食事摂取基準（2010年版）』（第一出版）

その他必要に応じて随時、紹介する。

栄養学実習		担当教員	み 三	うら 浦	つとむ 努
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択		
実習	1 単位	1 年次後期	選択		

[1] 授業のねらい

「栄養学各論」の基礎理論をふまえ、人の発達段階やライフステージに見合った食事のあり方を実習する。栄養アセスメントに基づいた食事計画を、「食品構成」に添って立案し、それぞれの対象に応じた食品選択や調理方法等を学ぶ。

また、これらが栄養指導・栄養教育を意識する学習につながるようにしたい。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 栄養学実習の目的・献立作成の手順について
- 第 2 回 食品構成による献立作成
- 第 3 回 妊娠・授乳期の栄養について（献立の作成）
- 第 4 回 妊娠・授乳期の食事（調理実習）
- 第 5 回 調乳（調理実習）
- 第 6 回 乳幼児期の栄養について
- 第 7 回 乳幼児期の栄養について（献立の作成）
- 第 8 回 乳幼児期の食事（調理実習）
- 第 9 回 学童期・青年期の栄養について（献立の作成）
- 第 10 回 学童期・青年期の食事（調理実習）
- 第 11 回 壮年期の栄養について
- 第 12 回 高齢期の栄養について
- 第 13 回 高齢期の栄養について（献立の作成）
- 第 14 回 高齢期の食事（調理実習）
- 第 15 回 実習のまとめ

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。

欠席を減点し、遅刻は欠席に扱う。また、提出物の未提出も減点する。

[4] 教 材

『応用栄養学実習』（学建書院）、プリント配布

[5] その他

4～5 人の班別実習とする。実習衣、帽子を着用し、帽子から髪が出ないように、衛生的な態度で実習に臨むこと。安全・衛生管理の観点から、実習の取り決めについては必ず従ってもらう。

公衆栄養学		担当教員	よし た かつ し 由 田 克 士
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

公衆栄養学は、国や地域社会を含む集団レベルでの疾病予防と健康の保持増進に必要な理論と方法を栄養学の立場から研究する実践的な学問（科学）と捉えることができる。しかし、実務経験のない者や学生にとっては、十分な理解が得られにくい内容も多い。そこで、授業においては可能な限り身近な具体的を数多く示し、公衆栄養学の基礎知識が無理なく習得できるように努める。なお、必要に応じて外部の特別講師による授業を行う場合がある。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 公衆栄養概説
- 第 2 回 国民の健康の現状と公衆栄養活動
- 第 3 回 日本の栄養問題 -現状と課題-
- 第 4 回 公衆栄養学への理解を深める
- 第 5 回 日本の食糧需給と食糧経済
- 第 6 回 公衆栄養プログラムの計画・実践・評価
- 第 7 回 健康日本 21 と公衆栄養活動
- 第 8 回 公衆栄養活動の指針 (1)
- 第 9 回 公衆栄養活動の指針 (2)
- 第 10 回 公衆栄養行政と関連法規
- 第 11 回 公衆栄養プログラムと健康教育・栄養教育
- 第 12 回 世界の健康・栄養政策
- 第 13 回 国民健康・栄養調査
- 第 14 回 公衆栄養学に関わるトピックス
- 第 15 回 まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。評価は試験成績を 80%程度、出席状況 20%程度の割合として評価する。欠席や遅刻・早退は減点の対象とする。

[4] 教 材

- 二見大介編著『公衆栄養学』（同文書院）
- 『日本人の食事摂取基準（2010 年版）』（第一出版）

調理学		担当教員	きし まつ しず よ 岸 松 静 代
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次前期	必修

[1] 授業のねらい

調理とは、食品素材に手を加えて最も好ましい状態で食物を口から入れるように食物調整を行う作業過程をいう。従来は調理操作のみを調理と考えていたのであるが、現在では、食事計画、食品素材選択、準備、調理操作を経て、供食、食卓構成に至るまでを含めた広い範囲を調理の分野と考えている。これら広い範囲にわたる様々の配慮を要して調理してはじめて、豊かな食生活を支えることができるのである。そこでまず本講義では、調理操作中における現象を食品群別に科学的に把えて解説を試みたい。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 調理学とは？食べ物のおいしさの要因
- 第 2 回 味の評価と調味料
- 第 3 回 調理操作（非加熱操作）
- 第 4 回 調理操作（加熱操作）
- 第 5 回 米と米粉の調理性
- 第 6 回 小麦粉の調理性
- 第 7 回 いも類の調理性
- 第 8 回 豆類の調理性
- 第 9 回 野菜・果物の調理性
- 第 10 回 獣鳥肉類の調理性
- 第 11 回 魚介類の調理性
- 第 12 回 卵類の調理性
- 第 13 回 牛乳と乳製品、油脂の調理性
- 第 14 回 砂糖・寒天とゼラチンの調理性
- 第 15 回 調理設備、器具、熱源

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。
欠席、遅刻、早退は減点の対象とする。

[4] 教 材

谷 洋子他『現代調理学』（医歯薬出版 2001）

[5] 参考図書

川端晶子他『時代とともに歩む新しい調理学』（学建書院 2009）

調理学実習 I		担当教員	きしまつしずよ さとうまみ 岸松 静代・佐藤 真実
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実習	2 単位	1 年次通年	必修

[1] 授業のねらい

調理することは人間生活を営むために欠くことの出来ない大切な要素であり、ここでは調理の基礎的知識の修得に重点をおいた。調理の技術は長い経験の積み重ねと反復練習の結果得られるものであるが、実習では理論に基づいて、短時間に再現性の高い技術を習得し、各人が科学的知識に裏づけされた正しい調理ができるようにすることを授業のねらいとした。

[2] 授業の計画

計量、調理器具、調理の基本と和・洋・中の基礎的な実習を中心に行い、示範時間を多くとり、実習は理論に基づいていることを理解させる。1 グループ 4～5 人編成で実習するので各人が実習出来ないものもあるため、ホームワークとして提出させる。

前期 <佐藤 担当分>

- 第 1 回 講義と演習（計量、器具、調味について）
- 第 2 回 講義と演習（包丁の使い方、栄養価計算）
- 第 3 回 日本料理の基礎（炊飯、だし汁）
- 第 4 回 日本料理の基礎（味付け飯、煮魚）
- 第 5 回 日本料理の基礎（赤飯、酢の物）
- 第 6 回 日本料理の基礎（すし、和え物）
- 第 7 回 米・だし汁に関する実験
- 第 8 回 西洋料理の基礎（スープ、ゼラチンの調理）
- 第 9 回 西洋料理の基礎（ルー、魚の調理）
- 第 10 回 西洋料理の基礎（カレー、小麦粉の菓子）
- 第 11 回 寒天・ゼラチンに関する実験
- 第 12 回 中国料理の基礎（点心、前菜）
- 第 13 回 中国料理の基礎（点心、炸菜）
- 第 14 回 西洋料理の基礎（パスタ、ソース）
- 第 15 回 実技部分チェック

後期 <岸松 担当分>

- 第 16 回 日本料理（丼もの、まんじゅう）
- 第 17 回 西洋料理（サンドイッチ、飲みもの）
- 第 18 回 中国料理（点心、湯菜）
- 第 19 回 日本料理（魚の串の打ち方、卵の熱凝固）
- 第 20 回 中国料理（点心、炒菜）
- 第 21 回 日本料理（炊き込み飯、天ぷら）
- 第 22 回 野菜・いもに関する実験
- 第 23 回 西洋料理（ひき肉の調理、特殊スープ）
- 第 24 回 日本料理（福井県の伝承料理）
- 第 25 回 中国料理（炒菜、炸菜）
- 第 26 回 西洋料理（揚げ物調理、卵の起泡性）
- 第 27 回 中国料理（前菜、湯菜、煨菜）
- 第 28 回 西洋料理（クリスマス行事食）
- 第 29 回 包丁研ぎ講習会、年代別弁当
- 第 30 回 主材料を指定した自主献立

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。

また、実技中心の授業のため授業期間内に実技試験を行う。また、実習ノートの作成を行い、年間5回提出する。試験40点、実技試験40点、実習ノート20点で評価する。

出席して実習することに意義があるので、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

西堀すき江編『食育に役立つ調理学実習』（建帛社 2007）を教科書として使用。

また毎回実習内容および資料をプリントして配付する。

[5] 参考図書

谷 洋子他『わかりやすい調理』（みらい 1998）

食品衛生学		担当教員	み たに かつ み 三 谷 勝 己
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次前期	必修

[1] 授業のねらい

人々の日常生活において、食は最も基本的な営みの1つであり、人の生命と健康の維持に深く関連している。しかし、現在の食環境は決して安全が保証されている状態にあるとはいえない。0-157 による食中毒やダイオキシンなど有機塩素化合物による食品汚染は事例としてすぐにあげることができるであろう。このように混迷しているなかでの生活を余儀なくされている今こそ、食品衛生学を学ぶ重要性が増している。

ここでは、科学的根拠をもとに示された基礎的な知識の習得と新しい情報の理解を深めることを授業のねらいとする。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 食品衛生の概念
- 第 2 回 食品衛生行政と食品衛生関連法規
- 第 3 回 環境と食品(環境要因)
- 第 4 回 環境と食品(汚染の過程)
- 第 5 回 食品と微生物(微生物の種類と増殖要因)
- 第 6 回 食品の変質(微生物による変質)
- 第 7 回 食品の変質(化学的変質と食品保存)
- 第 8 回 食中毒(分類と発生状況など)
- 第 9 回 食中毒(細菌性食中毒、ウイルス性食中毒)
- 第 10 回 食中毒(自然毒、化学物質、アレルギー)
- 第 11 回 寄生虫疾患と異物
- 第 12 回 有害物質による食品汚染(カビ毒、有害金属など)
- 第 13 回 " (農薬、放射性物質など)
- 第 14 回 食品添加物(現状と実際)
- 第 15 回 食品添加物(安全性、使用基準、表示義務など)

[3] 評価の方法

試験期間中の試験 60 点、ミニテストなど 40 点の 100 点満点で評価する。なお、授業の取り組む姿勢、授業進行の妨げになる行為(私語、携帯電話など)は採点の対象とする。

[4] 教 材

必要に応じてプリントを配付する。

[5] 参考図書

谷村顕雄・豊川裕之『食品衛生学』(南江堂 2007)

食品衛生学実験		担当教員	み たに かつ み 三 谷 勝 己
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実験	1 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

近年、食品の多様化、輸入食品の増加など食をめぐる環境の変化が著しく、それに伴って一般の人たちの食への不安が高まっている。また、HACCP システムの導入など食品衛生管理に対する要請も強まってきている。こうした状況をふまえて、ここでは食品衛生に関する基本的内容を実験で明らかにして、食品衛生の理解を深めることを実験の目的としている。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 食品衛生検査の目的と方法
- 第 2 回 大腸菌群の検査
- 第 3 回 有害性金属の検出
- 第 4 回 食器の洗浄度試験（デンプン残留物、脂質残留物、洗剤など）
- 第 5 回 石鹼の製造
- 第 6 回 食品油脂の酸敗試験（AV、POV、TBA 値）
- 第 7 回 比色分析法（検量線の作成）
- 第 8 回 食品の発色剤の定性と定量（1）
- 第 9 回 " (2)
- 第 10 回 野菜中の硝酸塩の測定
- 第 11 回 食品の合成着色料の分離、検出（1）
- 第 12 回 " (2)
- 第 13 回 食品の合成保存料の定量
- 第 14 回 食品の漂白剤の定量
- 第 15 回 食品の調味料の定量

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。
 実験レポート 40%、試験期間中の試験 40%、授業の取り組む姿勢など 20%で総合評価する。
 出席して実験することに意義があるので、実習態度、欠席、遅刻は減点の対象とする。

[4] 教 材

資料をプリントして配付する。

[5] 参考図書

- 清水英世編『新版 図解 食品衛生学実験』（みらい 2003）
- 一戸正勝編『図解 食品衛生学実験』（講談社 2004）
- 川村一男編『食品衛生学実験』（建帛社 1998）

[6] その他

実験は 2～3 名のグループで行う。
 白衣着用などの授業前注意事項を必ず守ること。

食品検査法		担当教員	なるせ 瀬みどり
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

フードスペシャリスト資格の必須科目である「食品の官能評価・鑑別論」の内容に沿って授業を展開する。食品を選ぶという行為には多くの背景と同期が存在しており、その行為を補助するフードスペシャリストにとっては食品についての深い知識と品質を見抜く技術が非常に重要である。

本科目は食品の生産・流通・消費についての知識を深め、鑑別や品質評価に必要な食品の検査法を学ぶことを目的としており、官能検査法・化学的評価法・物理的評価法の3分野について、特に重点的に演習を行う。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 食品検査の目的と意義
- 第 2 回 食品の品質と水分活性
- 第 3 回 水分活性の測定
- 第 4 回 食品の外観と成分 ①植物性色素
- 第 5 回 食品の外観と成分 ②動物性色素
- 第 6 回 糖度と酸度
- 第 7 回 魚の鮮度検査 (K 値による測定)
- 第 8 回 油脂の酸化
- 第 9 回 油脂の過酸化物質の測定
- 第 10 回 物理的評価法の目的と意義
- 第 11 回 レオロジーについて
- 第 12 回 官能検査の目的と意義
- 第 13 回 官能検査の手法について
- 第 14 回 官能検査 (2 点比較法・3 点比較法・評点法)
- 第 15 回 データのまとめ方

[3] 評価の方法

試験期間中の試験 70%、レポート 30%を加算し合計点とする。

その他、欠席、遅刻・早退及び授業進行の妨げになる行為を上記の合計点より減点して総合評価する。

[4] 教 材

日本フードスペシャリスト協会編『食品の官能評価・鑑別演習 第3版』(建帛社)

[5] 参考図書

科学技術庁資源調査会編『五訂日本食品成分表』(医歯薬出版 2002)

[6] その他

実験室内では、白衣及び上履き着用などの授業前の注意事項を必ず守ること。

鑑別実習は、2~3 人のグループで行う。

関数電卓を用意すること。

栄養指導論 I		担当教員	まきの野みゆき
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

栄養指導とは、人々の健康の保持増進、疾病の予防、疾病の治療・治癒の促進等を目的として、指導対象へ食生活・栄養改善を中心とした知識の普及、実践指導を行うことである。そのために、栄養指導論 I では、栄養学、臨床栄養学をはじめとする栄養、健康関連の諸科学を基礎として、具体性をもった指導をするための手法を理論的に理解することとする。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 栄養指導の目的と意義
- 第 2 回 栄養指導の歴史・変遷
- 第 3 回 栄養士関連法規
- 第 4 回 日本人の食事摂取基準とその活用
- 第 5 回 食品構成とその活用
- 第 6 回 食品分類法とその活用
- 第 7 回 特別用途食品 食品の栄養成分表示制度
- 第 8 回 栄養指導の方法・技術
- 第 9 回 栄養指導の効果判定
- 第 10 回 国民健康・栄養調査結果の概要(1) 食物摂取状況調査 生活習慣調査
- 第 11 回 国民健康・栄養調査結果の概要(2) 身体状況調査
- 第 12 回 栄養状態の評価と判定
- 第 13 回 栄養指導とカウンセリング 栄養指導と情報処理
- 第 14 回 対象別栄養指導の要点
- 第 15 回 栄養指導の国際的動向

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。
 試験 70%、小テスト 20%、レポート 10%の割合で評価する。
 欠席、遅刻、早退及び授業進行の妨げになる行為(私語、携帯電話など)は減点する。

[4] 教 材

相川りゑ子他『栄養指導論』(建帛社)
 他に資料をプリントして配付する。

[5] 参考図書

藤沢良知『栄養・健康データハンドブック』(同文書院)
 『日本人の食事摂取基準』(第一出版)

給食管理		担当教員	くわ の よう こ 桑 野 洋 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

栄養士が特定給食施設で継続的に提供する食事は、喫食者の健康を維持・増進し、心身の健全な成長および疾病予防と治療を促すために計画され実施されなければならない。

その給食を提供するに当たり、栄養士としての基礎知識と実践面での応用力が備わるよう、法的な裏づけや栄養士業務を学ぶ。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 特定給食の概要 意義と役割
- 第 2 回 健康増進法における特定給食施設とは
- 第 3 回 特定給食の位置付けと役割 組織と人事
- 第 4 回 経営管理 運営形態とアウトソーシング
- 第 5 回 特定給食施設における栄養管理基準
- 第 6 回 給食における栄養・食事管理—食事摂取基準
- 第 7 回 給食のための栄養・食事管理—献立計画・実施
- 第 8 回 給食の生産管理 品質管理 食材料管理
- 第 9 回 原価管理（コストコントロール）
- 第 10 回 給食における危機管理（衛生・安全管理）
- 第 11 回 HACCP 大量調理施設衛生管理マニュアル①
- 第 12 回 HACCP 大量調理施設衛生管理マニュアル②
- 第 13 回 各施設の給食管理（病院給食等について）
- 第 14 回 各施設の給食管理（学校 保育所 老人施設等）
- 第 15 回 特定給食における評価と食育

[3] 評価の方法

試験期間中の試験とレポート（提出物・小テスト等）で評価する。

試験 70%、その他（課題レポート・小テスト）30%を総合評価する。

欠席 遅刻 早退および授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教 材

木村友子・井上明美著『楽しく学ぶ給食経営管理論』（建帛社）
厚生労働省策定『日本人の食事摂取基準 2010 年版』（第一出版）
必要に応じてプリントを配布する。

[5] 参考図書

『給食の運営 給食計画・実務論』（医歯薬出版）
井上明美著『給食経営管理実習』（みらい）

解剖生理学		担当教員	さいとうまさかず 齋藤正一
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年後期	選択

[1] 授業のねらい

人体のなりたち（構造：解剖学）とはたらき（機能：生理学）を話します。ひとりの人間は生物としては一個体ですが、そのからだを支える骨格、それを動かす筋肉、さらにそれを統合する神経、というような機能的なまとまり（「系統」といいます）にわけて見ることができます。このまとまりは、さらに骨、筋肉、内臓といった「器官」から成り立っていて、顕微鏡を使うと、「組織」と呼ばれる構造があり、「細胞」と呼ばれる生命の基本単位がおのおの独立に活動しつつ、個体の生命を担っている様子がわかります。こうして「人体の構造と機能」に関する知識が、「健康な生活を送り、どうすれば病気を予防・治療できるか」を考えるとときに有力な手がかりになるのです。ただ、その量は膨大で、解明されていないことも多く、すべてを語りつくすことはできません。受講者が将来、健康・病気と栄養との関係をさらに深く学ぼうとするときに役立つような知識を身につけてもらう、というのがこの授業のねらいです。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 生体のなりたち：細胞・組織・器官・系統
- 第 2 回 遺伝子と細胞・組織
- 第 3 回 骨格系と運動器系
- 第 4 回 消化器系
- 第 5 回 呼吸器系
- 第 6 回 循環系
- 第 7 回 血液と体液
- 第 8 回 免疫系
- 第 9 回 エネルギー代謝と体温調節
- 第 10 回 内分泌系
- 第 11 回 神経系
- 第 12 回 感覚器と皮膚
- 第 13 回 泌尿器系
- 第 14 回 生殖器系
- 第 15 回 まとめ

[3] 評価の方法

講義終了後、試験期間中に筆記試験を行い、その成績にによる。基本的な知識が修得できているかを確認する。正当な理由なく遅刻・早退が度重なる場合は、減点の対象にします。

[4] 教 材

河田・三木（編）「栄養科学シリーズ NEXT 解剖生理学」第 2 版（講談社 2007）

[5] 参考図書

必要に応じ、そのつど講義の中で紹介する。

[6] その他

毎回、数枚のプリントを配布し、スライドを併用して講義する。前に配布したプリントを後から参照することもあるので、既に配布した分も含めて毎回持参すること。欠席等のために貰いそびれた人にはバックナンバーを準備するので、申し出て補っておくように。ファイルフォルダー（A4 サイズ）を用意しておくとう便利です。

有機化学		担当教員	あさ 浅	はら 原	まさ 雅	ひろ 浩
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択			
講義	2単位	1年次前期	選択			

[1] 授業のねらい

有機化学は、主に炭素を骨格として構成される化合物の構造・性質・合成・反応等を幅広く研究するものである。本講義では、食品化学・栄養学・生化学等の授業に必要と思われる、有機化合物に関する化学の基礎を身につけることを目的として系統的に講義する。

[2] 授業の計画

- 第 1回 有機化学入門
- 第 2回 化学結合と構造
- 第 3回 命名法と分類
- 第 4回 アルカン
- 第 5回 アルケンとアルキン
- 第 6回 芳香族化合物
- 第 7回 アルコールとエーテル
- 第 8回 フェノールとチオール
- 第 9回 アミン
- 第 10回 アルデヒドとケトン I
- 第 11回 アルデヒドとケトン II
- 第 12回 カルボン酸
- 第 13回 エステルと酸無水物
- 第 14回 アミドとその他のエステル
- 第 15回 食品成分・生体成分の有機化学入門

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。
授業中の提出物等30%，期末試験70%とし、出席状況および授業態度を含めて総合的に判断する。

[4] 教 材

熊谷仁・熊谷日登美・大熊恵美子 共著
「栄養学・食品学を学ぶ人のための初歩の有機化学」3版 (アイ・ケイコーポレーション・2009)
および、時々、関連するプリントを配布する。

[5] 参考図書

立屋敷哲著「生命科学・食品学・栄養学を学ぶための有機化学基礎の基礎」(丸善)
赤路健一・福田常彦著「生命系の基礎有機化学」(化学同人)
また、高校〔化学I〕の教科書や図説およびこれに準じた参考書などもあるとよい。

[6] その他

講義では必要に応じて、ビデオ教材等を利用する。

栄養情報処理		担当教員	み 三	うら 浦	つとむ 努
授業の種類	単位数	配当学年・時期		必修・選択	
演習	1 単位	1 年次後期		選択	

[1] 授業のねらい

フードスペシャリスト養成の必修科目である「食品の官能評価・鑑別論」に沿って授業を展開する。食品の生産、流通、消費という川の流れにたとえられるシステムを消費の側からいわば川を遡る形で観察、研究していき、さらに食品の知識を深め、食品の知らない面も明らかにされて興味も沸いてくるであろう。フードスペシャリストに必要とされる知識や技能は多岐にわたるがいろいろの食品栄養についての深い知識と、それらの品質を見抜く技能が基本になくはならない。そして、これら集められた情報を適切に「処理」することが大切である。業務に必要な調理・栄養計算表などの作成について学ぶ。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 統計検査法の計画 官能評価について
- 第 2 回 統計検査法の計画 表計算ソフトについて
- 第 3 回 統計検査法の計画 表計算ソフトによる計算
- 第 4 回 統計検査法の計画 表計算ソフト 条件付表示
- 第 5 回 統計検査法の計画 表計算ソフト グラフ作成
- 第 6 回 品質評価のデータ処理
- 第 7 回 品質評価のデータ処理 標準偏差について
- 第 8 回 品質評価のデータ処理 散布図・ヒストグラム
- 第 9 回 食事・栄養摂取による調査・診断 栄養計算ソフトの使い方
- 第 10 回 食事・栄養摂取による調査・診断 栄養計算ソフトのしくみ
- 第 11 回 食事・栄養摂取による調査・診断 栄養計算ソフトの機能
- 第 12 回 食事・栄養摂取による調査・診断 栄養計算ソフトによる栄養診断
- 第 13 回 食事・栄養摂取による調査・診断 栄養計算ソフトによる栄養診断
- 第 14 回 栄養出納表の作成
- 第 15 回 栄養診断の判定・まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。授業中に作成する課題を評価する。
欠席を減点し、遅刻は欠席に扱う。

[4] 教 材

必要に応じて指示する。

[5] 参考図書

『Excel で学ぶ当統計解析入門 Excel 対応版』（オーム社）

[6] その他

コンピュータは個別に一人ずつ使用する。

フーズスペシャリスト論		担当教員	かとうたかお 加藤隆夫
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	1年次後期	選択

[1] 授業のねらい

近年、食べ物は、その生産・加工、流通の技術的進歩により、種類の増加とともに、嗜好性を付加した加工食品が市場にあふれるようになった。さらに調理においても伝承料理に加え、美味しい料理が工夫され提供されるようになった。一方、食べ物には食品添加物が多用されたり、遺伝子組換え食品の出現など、消費者の不安をぬぐいきれないものがある。

そこで、食べ物に関して科学的根拠による官能・鑑別検査のできる技能者が市場や販売現場に配置されていれば購入者・販売者ともに安全・便利である。さらにレストランなどに、メニュー・食器・食環境のコーディネートを行うことのできる専門職の存在も望まれる。これらの要請にこたえ誕生したのが「フーズスペシャリスト」資格（日本フーズスペシャリスト協会認定）である。

本講義では「フーズスペシャリスト」になるための専門性について概説する。

[2] 授業の計画

- 第 1回 フーズスペシャリストとは
- 第 2回 食品の化学・物理的評価、食べ物の官能評価
- 第 3回 食品の鮮度・熟度判定
- 第 4回 食品の安全性とその評価
- 第 5回 食品の品質規格
- 第 6回 食品のおいしさと生理・心理：味覚の生理
- 第 7回 食品の味覚物質
- 第 8回 食品の味覚心理
- 第 9回 嗅覚の生理
- 第 10回 調理と食味論：調理と献立、食欲
- 第 11回 食環境と嗜好性
- 第 12回 食品の流通と消費
- 第 13回 //
- 第 14回 食品と料理の文化
- 第 15回 //

[3] 評価の方法

試験期間中の試験：記述式、持ち込み不可(試験 100 点、欠席は減点する。)

※授業開始後、5 分以上の遅刻は欠席とする。

[4] 教 材

日本フーズスペシャリスト協会編『スペシャリスト論』（建帛社）